

平成二十四年・二十五年に、生誕百年となった今は亡き父・正一と母・クニに捧ぐ。

賑橋渡る

タカハシ
ユキオ

ごへん

夢枕 ● 一

賑橋渡る ● 三五

喜六の菓子 ● 六〇

初荷 ● 一四

夢枕

一、棺箱売り

今朝方、夢を見た。

私が、というより正吉という歳の頃、十を過ぎたほどの子供が、荷車に棺箱(がんばこ)を一つ積み、町なかを曳(ひ)いている。

「ガンバコ、要らねがー」

「とつチャンがこしえだガンバコ、要らねがー」

と恥ずかしそうながらも、けなげに曳き歩いてる。

棺箱売りというのは初耳だ。それも子供一人で売り歩いている。なんと奇妙な夢を見たものだ。夢の中の町は、定かではないが大正か昭和の初め頃、私の田舎の風景だろうか。

正吉の父親は、私の父の名前である正一といった。町はずれ、河原町の今にも崩れ落ちそうな長屋に、正吉と二人居座っている。正一の放浪癖、酒や女癖、加えて当然ながら銭力ネにも甲斐性がないことに、すっかり愛想をつかし、女房は長女を連れて何処ぞに飛び出てしまった。

長屋は極楽長屋と呼ばれ貧民窟だ。その訳は、長屋の家主が、

「自分は一度死んで、地獄極楽をみてきた」

と言つて、死人が出た家に行つては、

「実は自分が先頃地獄へ行つた時、お前さんこの〇〇が鬼に責められているのを見てきた。いくらか出せば、ご祈祷して地獄から救つてあげる」

と錢をせびるという噂があるからだ。

そんなことで、正一も日がな食うために、あちこち思いつく場所に向いてはその日の糧(かて)に何とかありつく様だつた。正一の暮らしぶりは呆れるほど不甲斐なかつたが、生まれ持つた手先だけは人様よりいくぶん器用だつた。家屋の小繕いなど、声が掛ければ腰軽く、愛想良く出掛けて行つた。だが、長続きするような気質ではない。時として、その手先の器用さが災いして、警察の厄介になることも二度や三度ではなかつた。

いつだつたか、手元人足の声が掛かり、鬼柳の鼠川原(ねずみがわら)というところの屋根替えに行つた折、近くで不幸があつた家に出くわした。長屋の家主の真似事ができるほどの度胸もない。母屋から離れた納屋の土間で、部落人が死人を入れる棺箱を拵(こしら)えている取り込み中だつた。軒先で見ている内に、その拵え方の要領をすっかり呑み込んでしまつた。

「そつだ、こいつなら錢になる」

と正一は考えた。人様はいつかは必ず死ぬ。その時には棺箱に厄介にならない御仁(ごじん)はいない。きつと儲かるに違いない。これで食いつばぐれがないはずだと、一人ほくそ笑んだ。

あくる日、正一は家主を何とか拝み倒し、荷車を借りた。棺箱にする木材を探しに出掛けた。この土地の棺箱は、堅棺という箱形のものを拵えて使う習わしだ。しかし、正一の思惑とは違い、川岸の材木屋の板はとも正一の懐の銭では手がでなかつた。どこぞに古材でもと探しまわつたが、この世知辛いご時世に、そんな都合がいいものが捨てられている訳がない。思案と途方に暮れ、手前(てまえ)の妙案もこれで終いかと諦めかけていた。

牡丹畑(ぼたんばたけ)という部落はずれ、鄙(ひな)びたお宮の前を通りかかつた。貧乏神が住み着いて、この先ずつと立ち退きそうもないお宮に見えたが、懐に手をつ込むと十錢玉を探りあてることができた。そいつを賽銭箱に放り投げ、柏手を思いつきり打ち、

「手前にもご利益がありますように」

と深々と頭を下げた。

そのまなこの先、お宮のまわりの縁先に目がいった。この板が剥ぎ取つて使つてくれと言つているふうに、勝手に正一は思い込み、決め込んで使わせて貰おうと思つた。さつそく剥ぎ取り、荷車に積み長屋に戻つたいう次第だ。

正吉が荷車に積んでいるこの棺箱は、その時のお宮の板で正一が拵えたものだ。決して見かけのいい物ではない。

「ガンバコ、要らねがー」

古着屋やえさは屋で賑わう新町に行く。正吉の掛け声を聞くが、往来の者はもちろん、売り声を聞いて顔を表に出した者も、イヤなものを見たかのようにみんな顔を背ける。

「坊主、何縁起でもないもの持ち込むんだ」

「魚が腐るじゃねえか、さつさと立ち去れ」

えさは屋は出刃包丁をかざし怒鳴りつける。その店先、乳飲み子を抱いた女は、子の目を手で被い早々に家の中に隠れる。みんな不吉なものに出会ったような眼差しで、正吉の荷車、棺箱を見るが、見ないような振りをするだけだ。

町の目抜き通りを越して、新穀町という花街にやってくる。西山の鉢山景気もひと頃のほどでもなく、店仕舞いをして堅気に商売替えをし始めたところもある。賑橋（にぎわいばし）のたもとに建つ仙華楼（せんかろう）の二階越し、白粉化粧の艶でな色模様を着流したお姉さんから、

「おやおや、坊や今日は誰の供養たい」

「あれあれ、不格好なものを引いてどちらまでかい。地獄それとも極楽かい」

と声が掛かる。終いには店先から女中頭がお出ましになり、塩を投げつける始末だ。

正吉が荷車をもう少し西の鍛冶町通りに向けると、四、五人の女学生たちが正吉にはまったく気付く様子もなく、棺箱なんぞには毛頭目もくれず通り過ぎる。おしゃべりに夢中で、今がいのちの盛りのお嬢様方だ。ただ、二、三步遅れて歩く一人が、少しだけ目をよこしたような気もした。

辺りが田んぼばかりの町はずれ、有田にやってきても、誰一人として棺箱を見てくれる者はいない。正吉はこのままでは帰れない。帰ったとしても、頭ごなしに怒鳴られ、ぶん殴られるだけだと分かっている。父親がどこでくすねてきたのか、古材で棺箱を拵えることを思いつき、それを甲斐性のない父親が拵えたというのに、このまま、この棺箱を持ち帰ることなどしたら、ただではすまされない。

秋の日暮れはつるべ落しに早い。先ほどまで黄ばんでいた景色が、あつという間にたそがれ色に変わり、しだいに色を失い灰色の刻に向かおうとしている。

傍らの地藏堂でしようがなく荷車を止め、その脇の草むらにしゃがみこんだ。しだいに昼間の疲れで眠気が正吉を誘う。

やがて、正吉の前にすくつと老人が立ち現われ、声を掛けてきた。晒(さら)しの経帷子(き

よいかたびら)を着て脚絆(きゃはん)をつけ杖をついている。頬かぶりを取った老人は、色を失せたような顔立ちだが、とても穏やかな顔つきをして正吉に尋ねてきた。

正吉は、父親が拵えてくれた棺箱が売れないこと。それを売らずには帰れないことなどを話した。老人はうなづき、

「それは、もつともなことだ」

「今しがた、おまえが通り過ぎてきた町の者たちには、要り用かどうかと思うまで、気が回らないのだよ。だから売れるはずない」

「かえって、邪険にして遠くに追いやろうとしている。みんなそうだ」と訳を正吉に教え、そして付け加えた。

「坊主、わしゃやがて死ぬ。それが明日かあさつてか、ひと月後か、一年後か、はたまたもつと先になるかも知れない。それまで待つてもいいのなら、わしがその棺箱を買おう」

正吉は、老人の申し入れに、どう返答しようか戸惑った。そして、

「でも、いつまでも待つていられない」

と正直に答えた。すると老人は、正吉の眼を見据えて、これも穏やかにかみ砕くように話した。

「わしゃ、きつと死ぬ。行き倒れになるかも知れないが、約束は守る」

「だから、おまえの棺箱が入り用になるのだ。この時世だから誰かがきつと棺箱に入れて葬

つてくれる」

「今のおまえには、知るよしもなからうが」

と老人は、首に掛けていた頭陀袋(ずたぶくろ)の中の錢の輪をほどき、その中から錢を抜き取り、正吉の手を開きそれを握らせ、手を結ばせなおした。錢が正吉の手の平に食い込むほどしっかりと、そして堅く。手甲を着けた手は歳に不相応で、力仕事をしていたようにゴツゴツしていた。

続けて老人は、棺箱の講釈をする。

「棺箱というものは、あの世の住処なのじゃ。人はいくらこの世で富を築いても、所詮最期は棺桶の大ききで済むのじゃ」

「死人は、無理矢理体を折られ、膝を抱きかかえるように棺箱に納められるが、その姿は母親の腹にいる時の姿と同じだ」

「だから、生まれてきた処があるとすれば、棺箱はそこに還る舟でもある」

すると正吉は、

「爺様、どれくらい死人を見てきた。十人かい、二十人かい。それとも百人もかい。おいらが見送ったのはたった一人、妹の幸だけだ」

「だどもあの時、幸の逝った処さ、いつかはおらも逝くことが分かった。ひよつとして爺様、おいらを迎えにきたのかい」

正吉の言葉に老人は、

「そうか、おまえははやくも深い井戸の底を覗いてしまったな」と皺を刻んだ顔に深い陰りを落としてつぶやいた。

そして町場の方、東を指さしながら、

「じゃがな、おまえはまだまだ若い」

「長く生きてても、わしもじゃが往生間際になつてさえ、分からないことが山ほどある」

「ましてや、これから渡る三途の川の向こう岸のこととなれば、なおさらだ」

「もう、おまえはここからあの町に戻るといい。辛いだろがわしと一緒に逝くには、まだ早い。いい旅土産に巡りあえた」

正吉が夜露の冷たさに目を覚ますと、老人とともに荷車の棺箱も消えていた。ただ、正吉の手の中に十銭玉が六枚残されていた。

東方、暗黒の中に町の灯りがにじみ出る。その賑わう様が遠く町はずれまでも届いてきそうな夜の気配だ。その中には、人の腰にへばりつき、夕夕酒にあやかろうとする正吉の父親の姿が目に見えよう。

二、穴掘り

また、夢を見た。

今度は、栄吾という男が精進落しだと言つて、昼間から一升瓶を脇に、湯飲み茶碗で酒をおおっている。

栄吾は私の叔父の名前と同じだ。極道であつた叔父が老いて身寄りもなく死んで、私がお骨を引き取つてきて墓に入れたというのに、今度はどうしたというのだ。

「あゝ、やだよだ。頭の上に四角い空が」

「生き埋めにされたもんじゃ、堪(たまん)ねえ」

と栄吾は独り喚(わめ)いている。一体何があつたというのだ。

栄吾は、独り身の舟頭だ。北上川の男山のすぐ付け根、岩脇(いわき)の渡し場でこの春から舟頭を始めていた。舟頭になる前は、結構な札付きで一つ処に落ち着くような性分ではなかつた。この渡し場も、栄吾はそろそろ嫌気が差しつつある。しかし、跡取りでない栄吾は、

里にいつまでも厄介になる訳にもいかない。もう兄貴の女房が家を全て差配(さはい)している。

そんなことで、川口側の舟着き場で、客待ちをしながら相棒相手に舟小屋で花札に興じている。栄吾は滅法花札は強い。ちよいとばかり銭を巻き上げ、独り悦にいつているこれまた小心者だ。

昼時が過ぎた頃、使いの者が戸板を叩いた。一瞬ガサ入れかと、二人に緊張感が走ったが、何と栄吾に用があるという。

「おまえさんの近所で不幸ができた」

「葬式の準備とやらで、手が要り用だろうから、すぐ戻りな」

との使いだ。栄吾はとりあえず手前の長屋に戻り、押入の行李(こうり)を掻(かき)分け、少しはこぎつぱりとした身なりに繕った。上がり口の水瓶から柄杓(しゃくし)で手に水を受け、髪も少しは撫でつけた。

不幸ができたのは、長屋の西隣三軒向こう、部落でも旧家で下働きを抱えるほどの家だ。何でも娘が流行病であつけなく逝ってしまったとか。先頃まで確か町場の女学校に通っていたはずだ。到底手前なんか足元に及ばない利発な娘に栄吾には見えたものだ。

とりあえず顔出しに行かねばなるまい。不幸ができた家の門口で部落の長老に出会った。

榮吾は仁義の切り方ぐらいは知っていたが、堅気の家へ、それも悔やみに顔を出すことなど未だ一度もなかつた。これ幸いと、長老に弔問のしかたを訊ねた。すると、

「まあそうだな、この度はご愁傷様ですとだな」

と告げれば良いのさと簡単に言う。しかし覚えの悪い榮吾には、なかなかこのせりふがすらすら出てきそうにもない。すると長老は、それじゃこう言いな。座敷に上がったら、深々と頭を下げ、

「この足袋、黒足袋、白足袋」*

と顎を引き、口ごもつて言えはいいと。

長老に教えられたように、頭の中で「黒足袋、白足袋」と念じ、腰を低くして、

「ご免なすつて」

と座敷に上がり、家主が座っている方に進み出た。周りでは、親戚の者たちが葬式の手はずやらの相談をしているようだ。顔出しに来た者がみんな神妙な顔つきで。これ以上の不幸な顔つきはないというふうにお茶をすすっている。脇には盆に赤カブの漬け物が茶請けに差し出されている。

榮吾が家主の前で、いざお悔やみのせりふを言おうとした。どうしたことかなかなか言葉が浮かばない。咄嗟(とつき)にさつき眼に入った赤カブが頭をよぎってしまった。すでに遅かつた。

「このカブは、赤カブ、白カブ」

とつい口を滑らせてしまった。しかし、当の家主は怪訝(げげん)に思うでもなく、当たり前のように受け答えてくれた。家主も可愛い娘を突然亡くして、人様からの悔やみどころじやなかつたのだろう。

開け広げられた座敷の奥に、娘は北枕にされ、枕元に香のしつらえと白いだんごが供えられている。栄吾は線香に火をつけたが、構わず吹いて消してしまう有り様だ。思いつきり鉦を二度叩き、手を合わせた向こうに、白い布を掛けられた娘の胸元に剃刀が置かれている。栄吾には到底その意味も分からない。

冷や汗もので悔やみを濟ませ、栄吾が土間に降りると、先ほどの長老が、

「おまえさんと留三には、穴堀りをお願いしたい。いいね」

と栄吾に役が割り当てられた。そして、

「穴堀りは明日の朝だが、その場所を覚えておく。今しがた用事が片付いたら、おつき合い願いたい。」

と告げて座敷に戻った。

夕刻近く栄吾は、長老に伴われ娘を埋葬する墓所に向かった。栄吾の長屋を真つ直ぐ西浦に向かうと、北上川の段丘にあたる処がこの町の墓所だった。寺は別の場所にあるので、こ

こにはがん小屋と墓所しかない殺風景な処だ。濃い杉林に囲まれた墓所を長老の後に従い進むと、長老は穴を掘る場所をここだと告げ、付け加える。

「くれぐれも間違わぬようにな」

「広さは三尺四方より少し広めに。深さは、そうだな、お前さんの背丈ほどあれば十分だろう」

栄吾は側にあつた枯れ枝を折り、目印に差し込み、その場を引き上げることにした。長老が灯した提灯で、余計周りが暗くなつてしまつたのに気付いた。長老が帰りしな嫌なことを言う。

「数年前、埋められた後で生き返つた者もいたな。よほど強運な奴だつたな」

「驚いたのは後で墓参りにきた家族だ」

「何しろ、土の中から声がしたのだから」

「助けてくれ。出してくれとな」

などと、栄吾を臆病者と知つてか、からかうような話をする。そして、そんなこともあるので、息つき竹を棺桶の上に差し込み、土を掛けるのだとも、まことしやかに教える。栄吾は、背後から誰かが付いてこないか、しきりに振り向き、振り向き長老の後ろに付いて戻つた。

翌朝、多少霽がかすむ中、栄吾と向こう隣の留三は墓所に出掛けた。ツルハシとスコップ、そしてなぜか莫莖(こぎ)を持って行くように言付けられた。

夕べ長老に指図(さしず)された目印の場所に、やっとのことで辿り着いた。霽の中では目印がなかったらきつと分からなかつたらう。

二人は、先に棺桶の大きさより少し大きめに、三尺四方ほどに見当をツルハシで印をつけた。脇の墓石代わりの石を外にひとまずだけ、先に若い栄吾がスコップを地べたに入れた。だが、なかなか堅くてスコップでは刃が立たない。ツルハシを取り、地べたの上つ面をガツンガツンとほぐしてやると、幾分掘りやすくなつた。墓所の地べたは、上つ面は石ころや雑草の根が絡まり、結構堅く締まっているものだ。程なく一尺ほど掘ると、次第に土は黒さを増し、幾分ホクホクしているようだ。穴の深さが進むほど、四方に黒土が盛られていく。

三、四尺ほどいくと、スコップの先に何かが突き当たつた。眼を暗い底に押し当てるようにしてよく見ると、それは髑髏(しゃれこうべ)だつた。

「ひえー、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

と栄吾は、不甲斐なくも穴の底に尻餅をついてしまった。留三は穴の上から顔を出し、すかさず、

「そいつは、確か七年前に葬られたこの家の婆様だ」

「もうそんな歳月がたったのか」

「丁寧に周りを探り、掘り上げる」

と指図した。用心深く周りをかき分けると、褐色の骨が幾本も出てきた。栄吾がこうして直に骨を目の当たりにするのは初めてだ。

留三に婆様の髑髏を差し上げた時、頭の上にはまだ櫛がひつついていた。歯も何本かそのまま残っている。留三は、持ってきた莫莖を穴の傍らに敷き広げ、婆様の骨を一つずつ確かめるように並べた。骨に混じって六文銭の銭も出てきた。

霧も晴れる頃、やっと六尺ほど掘り進んだ。穴の中の栄吾は、地べたに掘り上げられた土の高さのせいも、井戸の底にいるような気がした。その底に腰を下ろして、掘り下げた地中の長さを測るように撫でて見ると、あちこちに骨のカケラや、朽ちて木炭のような木片が見え隠れする。

栄吾は、

「一体この墓所にはいくつの軀(からだ)が折り重なって埋まっているのか」

と、その堆積された時の深さを手で触り、穴の底から地上を見上げた。

「穴に埋められるという気分は、こういうことか。これでさらに手前の掘った土が覆い被さる訳か」

「やけに天上が狭い気がするぜ」

「やだやだ、まるで死人になったようだ」

と立ち上がり、留三に一刻も早く引き上げてくれるよう声を掛けた。

「なあに、そのまま穴に入っていて、娘つこの人身御供（ひとみごころ）となればいい」

「それもお前の本望ではないか。違うかい」

と留三が悪さを言う。

泣き出すほどに拝み込み、ツルハシの先に掴まり、手前の掘った穴からやつとのことで榮吾は地上に戻った。

そして榮吾は、地上から穴を覗き、一人が最期に納まる広さを、今度はまじまじと見下ろした。

榮吾が長屋に戻ると、清めの酒とご苦労分の心付けが届けられた。それを手前の精進落としに、昼間からこうして飲み始めているという訳だ。

今頃はがん小屋前で葬式も済み、手前の掘った穴に、あの娘の棺桶が降ろされているに違いない。線香の匂いと煙が覆い尽くす中、一握りずつまた土を被せ、土饅頭（どまんじゅう）になろうとしているのかと思うと、榮吾でさえ堪え切れなくなつた。闇のようなあの世に手前もいつかは入るのかと思うと、酔えもせず背筋が震えてきた。

やがて、その怖さに耐え切れなくなり、日暮れも待てず、頂戴した銭を懐に押し込み、町場に走った。賑橋（にぎわいばし）の花街に一直線に。

しかし、その晩の榮吾の脳裏からは、手前の掘った穴から見上げる四角く、狭い空の恐怖をかき消すことはできなかった。

三、死人語り

またまた、夢を見た。

金縛りにあったように身動きがとれない。雁字搦(がんにじがら)めの黒い闇に閉じこめられている。しきりにもがいているは私であり、正平という祖父と同じ名の男でもある。

「何てこった。これで一巻の終わりがいい」

叫んでみたとして、手足を動かさそうにも何も出来ない。振り上げようとする拳に数珠らしきものが握られている。

「ひよっとして、ここは墓の中か」

やっと正平は、事の次第をいくらかかずつであるが思い起こしつつある。手前(てめえ)が死

んだこと。そして今、土の中であることに気付いた。

正平は下駄職人だ。弟子も取らず一人親方職人で、若い時分(じぶん)は修業と称し、地方のまちを転々と遊び歩いた。やっと五年前、女房の木乃が生まれ育った田舎町に腰を落ち着けた。所帯を持って、まだ三年とふた月にしかなかった。正平四十二歳の大厄の当たり年だったという訳だ。

正平は、闇の中で思いを巡らせた。

こんな歳で死ぬなんて努々(ゆめゆめ)思っていないから、確か手前の墓所はまだ手当してない。果たして木乃の奴は、この手前をどこに埋めやがったのか。とすると、ここは木乃の里の墓所か。それとも別な墓所か。

手前の思う通り、木乃の里だとすると、何回か墓参りに来たことがある。町の西浦で、杉の木立の間から木乃の里の町を、その向こうに東の山裾をぬうように北上川が流れるのが見下ろせる場所だ。そして今、手前の墓所に、いやこの頭の上に新しい土饅頭(どまんじゅう)が出来ているということだ。

今し方埋められたとすると、今頃は葬式の後のささやかな宴だろう。そいつを終えると、木乃はまた夕刻ここにやってきて、手を合わせるに違いない。手前が手離さなかった焼酎を頭上に波々と掛けてくれる。そういえば幾分、頭の上が重々しく、わずかだけ冷たい気がし

ないでもない。

木乃はきつと、この場を離れがたく思い、しばらく黄昏時の町を眺めながら、手前との暮らしのことを思い起こし懐かしみ、手前が今何処の辺を旅しているのかと、少ししんみりするだろう。それとも、もう別の男のことを思っているだろうか。木乃はちよつとふつくらしているが、まだ若い。特に大家の爺さんは、以前から木乃に年甲斐もなく色目を使いやがるから心配だ。ちよつかり葬式の差配(さはい)とか何とか口実をつけ、旦那気取りで上がり込んでいやしないか。

いやいや今日のところは、手前も休む暇もなく、大部疲れてしまった。焼酎も頂いたのでちよつと酔いも回った。明日からのこともあるので、今日のところは少し早く床に、いや棺箱の中で眠ることにしよう。

あくる日、闇の中で目を覚ました。

夕べ早く休んだせいか、少し体が軽い。いろいろ思案したが、することもないので、なぜ手前がくれたばつたか思い起こしてみる。だがなかなかその訳が、その前後の事の次第がはっきりしない。いや、事の解明に急ぐことはない、時間はたつぷりあるのだから。

おそらく死んだという日は四日前。翌日に入棺され昨日の埋葬だ。随分手際よく運んでくれたもんだ。

死んだという当日の昼下がりに、手前は造り置きしていた下駄を風呂敷で背負い、木乃の里の町まで卸しに清水小路の店を出た。店といつても間口二間半の借家だ。仕事場の店とタタミの小間が二間きりで、木乃との夫婦所帯には不自由しない広さだ。

河原町を抜け、九年橋のたもとで一服した。ここは団子町とも呼ばれ、松並木の道の両脇に数件の団子屋や茶店がある。一服を終えて腰を上げると、店の婆さんが後ろから声を掛けしてきた。

「今朝からカラス鳴きが悪くてやだねえ」

「お前さんも、気をつけて行きなされ」

と余計な節介をやく婆さんだと思つた。

橋を渡ると鬼柳村に入る。あの日の卸し先は川口屋という雑貨屋だつた。緩やかに左に折れ田んぼの中の道を行くと相去の町にさしかかった。

その附近で嫌なことに葬式の列に出くわした。ヒタイガミをつけた列に野辺送りの飾りは賑々しく、嫁入り道中を見る思いがした。川口屋で聞くと、流行病で亡くなった十五、六の娘の葬式だと言う。

下駄は夏場を過ぎると、めつきり足が遅くなる。春先まで預け、その頃また新しい品を届けることにし、商い話を済ませ戻ることにした。

戻る途中、荒堰(あらげき)に架かる橋のたもとに草履(わらじ)が脱ぎ捨てられていた。捨

てられているというより並べて置いてあった。手前はこれはきつと、あの娘の葬式の草履に
違いないとピンときた。こいつを持っていけば、きつと運が開けるに違いないと、早速懐に
しまい込んだ。

また九年橋を渡り、団子町を通り過ぎる頃、大部薄暗くなりかけていた。団子屋のあの婆
さんが、店先に提灯を掛けようとしていた。

「昼間のお客さん、何事もなくてようござんしたね」

「暗くなつて来ましたから、足元くれぐれも気をつけなさい」

とまた要らぬお節介をやいた。手前の懐には、草履という密かな運が仕舞い込んである。
木乃と一杯晩酌でもしたら、ちよいと馴染みの賭場にでも顔を出してみるか。木乃も少しは
目を瞑つてくれるに違いない。などと、良からぬことで頭が一杯だった。

手前は河原町の東の裏手にまわった。ここからは清水小路の店に、せまい道だが近道だ。
そこには極楽長屋と呼ばれているしみつたれた長屋がある。風当たりが冷たくなったので、
腰の手ぬぐいで頬かむりをした。もう手前の頭の中には、晩酌とその後の賭博のことしか
なかった。

とした時、手前と出会い頭にぶつかりやがった奴がいた。こちらも先のことで夢中だった

のこ、

「お互い様よ。気をつけて行きな」

と声を掛け、そのまま進んだ。後ろからそいつが、なぜか愛想良く声を投げてきた。

「旦那も気をつけなあ。懐に」

とその時は何のことかと気も留めず、背を丸め若宮町の通りにさしかかった。その時が、今思えば手前の運が奴に抜き取られ、不運の憂き目に転じた始まりだった。

不運はたちまちやってきた。馬車鉄道をまたごうとして、ついそのレールにつまづき転んでしまった。そして、さしかかった馬車に巻き込まれてしまったとう訳だ。手前が最期に臉に焼き付けたのは、倒れた手前に顔をすり寄せるようにした馬の大きな瞳だ。哀れな手前の姿がその奥に映っていた。耳元で、

「おーい、おーい」

と叫ぶ声がし、遠のいていった。

闇の中、ここまで辿り着くのの一日を費やしてしまった。そして、かなり疲れてしまった。また深い眠りに落ちていく。

五日目が開けたらしい。

昨日一日思いを巡らせたためか、体がだるい。こんな日は一日ぼんやりと、極楽トンボを

決め込み陽なたぼっこでもするのが一番だ。だがここには陽が届かない。

気にかかることがある。手前の在所の親たちには知らせがついたのだから。年老いた爺婆には、親不幸な思いをさせてしまった。短い命だったが、いいこともあつたが、ついてないこともあつた。多かれ少なかれ悪いこともしてしまった。そいつを結局、この闇の墓所まで持ってきたというこつた。だが、障子に目あり、便所にクソありの例え話もある。隣の穴で誰ぞやが聞き耳を立てているかも知れない。だからあえて話すのはよそう。

こんな堂々巡りの思いで、今日も陽が暮れようとしている。明日こそは、しゃつきりとしてようと心に決め、また闇の中の床につく。

もう六日目となる。

今日は雨降りらしい。体が何となく垂れていくようだ。意識も昨日よりことさら朦朧(もうろう)としている。逆に耳だけは聞こえがいい。

地中に浸み込んだ雨は、乾いた死人をよみがえらせ、うなり、わめき、すすり泣く音が、闇を這つて伝わるようだ。まだ、手前は成仏しきっていないから、こいつらの言うことが分らない。雨水に溶け込んだ死人の魂は、地下で脈をつくり、やがて地表に湧き出る。地べたの上の奴らには、そいつが見えないだけだ。きつと水に溶け込めぬ魂は、このような雨の日に地べたの上に抜け出す。火の玉となつて居場所を探し、行く当てもなく、また地中深く

潜り込む。

土饅頭は、手前の棺桶の量だけの土が盛られて出来る。それもやがて月日が経つに連れて、少しずつ平らになつて、また元どおり周りの地べたとちよつどいい案配に落ち着く。その時が手前のすべてが地に還るといふことなのか。

七日目の朝。

昨日の雨を受け、少しだけ体に潤いを取り戻したようだ。しかし、内心もう朝も昼も、もちろん夜もあつたものじゃない。疲れ切つてゐる。体から何か滲み出るものがある。そうか臓物が朽ち始め、随分目もくぼんで来た様だ。これではまるで死人みたいだ。いやいや立派な死人なのだ。もう皮膚が崩れ始め、血管が剥き出しになりつつある。手前の体に別の生命体、いや蛆虫(うじむし)がはい回つてゐる。少しずつ食ひ、少しずつ太り、数を増やし、手前の体を形なきものにしていく。

やつと、闇の死人の聲が分かるようになった。やはり、習うより慣れるというのが身にしみて分かつた思ひだ。その声の多くは、地べたの上に暮らす者たちへの思ひで一杯だ。だが、闇の住人が思うほど、伝わらないものらしい。決して、別の世界ではなく、こうして死人がやがて土となり、水に溶け込み、野辺を潤していることに気が付かないでゐるだけだ。

七日目の夕刻が近くなる頃。

次第に心なしか闇が白らんでいくのが分かる。すでに体は無重力の状態で、ふわふわしている。手前の若い頃と同じと言えばそうかも知れない。何かそわそわしている手前がある。

そういえば、今日は手前の初七日だ。月日の経つのは早いと言うが、この闇の中でもそうだ。初七日には、きつと木乃が墓参りに訪れるに違いない。手前の好きだった桔梗の花なんぞ手にして、いそいそとやってきてくれるだろうか。葬式の後の片づけは済んだらうか、やり残しの仕事は拵(こしら)えない性分(しょうぶん)だったので、得意様には迷惑を掛けてないだろうが。ただ、銭をあまり残してこなかったのが気がかりだ。まだ若いからなんとかやっていけるだろう。幸い子供もつくらなかつたし、木乃が自由にできるはずだ。

子供、ちよつと待てよ。いないいない。隠し子なんぞ金輪際いないぞ。

木乃の鬢(びん)付け油の匂いがする。墓参りにやって来てくれたらしい。頭の上を感じる重さからお前と分かる。ちよいと手前の体もなぜか自由が利くようになったし、木乃の姿を拝むとするか。少し気持ちをねじり加減に、草の根を伝つて地べたに抜け出そう。

「お前さん、あの世はどうかい」

「何も不自由な事はないかい」

と木乃は少しばかり低くなつた土饅頭の上に置かれた卒塔婆(そとうば)に手を合わせてい

る。その土饅頭には一寸ばかりの草がほつりほつりと、無精髭のように生えている。

木乃に、

「おい、ここに手前がいるぞ」

「このちつぽけな草に、手前の魂が染み込んでいるぜ」

と懸命にささやくが、木乃には通じない。木乃はこの草を、ちぎり、抜き取り墓所の脇に追いやり、そして周りの枯れ草と一緒に、袂からマッチを出し火を点けた。やがてパチパチと音を立て煙りながら、手前の魂もろとも煙となって秋の夕空に昇っていく。

もう、闇の中の正平の意識も途絶え、降り注ぐ光の束に吸い込まれるように、天上に駆け上がっていく。

四、石屋

度重なる不吉な夢も、そろそろ終いにして欲しい。と思っていた朝方、また夢に遊ぶ。

私の前に、年の頃五十前のふつくらした女が訪ねてきた。いやいや、いつもながらのこと、私ではなく栄之助の店先にである。栄之助もこれまた私の曾祖父の名前だ。栄之助の女房は、脇から怪訝(げげん)そうに伺っている。

「そうでやすか、七回忌にとな」

「奥方もご苦労なさいやしたこと」で」

栄之助は、歳相応の穏やかな応対を訪ねてきた女にする。しかし、女のたつての願いを断ろうとしている。何かこの二人に深い内緒でもあるのだろうか。女房だけでなく、その訳を知りたいと思うのは誰しもの心情だ。

黒沢尻の和野といえ、湧き水の豊かな処で近郷近在によく知られ、本町や川岸といった南部のご時世以前より住処(すみか)として、邑(むら)を成してきた場所である。栄之助は和野屋の三代目となる石屋、墓石職人である。歳の頃は既に七十にならんとし、女房サキも共に健在である。

駅前から清水小路に抜ける青柳町に、加工場を兼ねた店を構えたのが先代の時だった。この栄之助夫婦には身寄りが無い。ないといえは嘘になるが、七つばかりの息子を川で溺れ死にさせてしまったのだ。その時、栄之助は寢食を忘れて仕事をする事で息子を忘れようとした。そして、それつきり子供を持つとうとしなかった。

だから栄之助の代で店を閉め、もし加工場や道具類が入用な者があれば、そろそろ譲り渡すつもりでいる。それに加えて、二年ほど前の冬、寒さのせいか少し脳卒中加減になり、利き腕の右手が思うようにいかない始末で、一層栄之助を萎えさせている。

「後生ですから、何とかお願いできませんでしょうか」

と女がしきりに栄之助に頭を下げる。栄之助はいつこうに首を縦に振ろうとはしない。

「ご覧の通り、もはやもうろく爺で」

「話を受けても、まともなものを拵(こしら)えることができやしません」

女は、亭主を不慮の事故で亡くし、新富町の料亭で下働きをしているとのことだ。また若いというのに再婚もせずに、亭主の墓石を彫つて欲しいとのことだ。

女は栄之助の承諾を得ることが出来ず、仕方なく帰つて行つた。奥から女房のサキが、

「お前さん、何とかならないのかい」

「何とかなれば、何でもする。しかしこの体では」

と栄之助は拳を握りしめるだけである。

栄之助の性分(しょうぶん)は、物腰は人一倍低いが、石屋に違わず頑固一徹そのものだ。

まだ、体がしゃきつとしていた頃、同じように女が訪ねてきた。その女は医者のお妾(めかけ)だったが、その時分(じぶん)はもう本妻となり差配(さはい)していた。医者は、奥方を病で亡く

す前からその女を囲い、お花とお茶の稽古場のある家を造り与えて、入り浸っていた。長患いの奥方が逝つたその通夜から、医者 of 振る舞いは、夕ガがあちこちにはずれたような毎日だった。そして、一年も経たずに死んでしまったのだ。その医者 of 墓石を頼みに榮之助の店を訪れたのだ。女がカネに糸目はつけぬと言つても、

「手前(てめえ)には、出来かねる話です」

「どこぞやにお頼み下さいまし。喜んでお話を受けて頂ける店があるはずですよ」

と榮之助は頑として受けなかつた。かえつてカネを積まれると意固地になつた。

またこんなこともあつた。町はずれの有田という処で、春先の一寸先も見えぬ地吹雪で行き倒れた親子があつた。一所不在の年がら年中、旅に暮れる子供連れのめくらの三味弾きだった。不幸にして還らぬ身となり、どこぞの寺 of 墓所に無縁仏として葬られた。それを知つた榮之助は、我がことのように供養にと地蔵を彫り、安置した。

榮之助は、また女房にこんな話をするがあつた。それは榮之助が見たという夢の話である。

「暗い流れの中を、なぜか墓石がほかりほかりと浮いて、どこぞやに流れていくのだ」

「そして、大きくて重い墓石から、沈んで見えなくなる」

「遠く流れていくのは、小さな石や卒塔婆(そとうば)なのじゃ」

と自分の夢と重ね合わせ、石を彫ること、人様の名を刻み残すという天職に、一抹の疑問を抱いていた。

銭のある者に限って、故人の供養、たと言いつつ大きい墓石を頼んでくる。それは供養ではなく、生きている奴の見栄や欲のための墓石だ。重たい墓石を小高い墓所にさえ、面倒しても高く高く引つ張り上げようとす。それは本人たちにすれば一生懸命供養のためと、徳を積んだ気持ちにさせることもある。だが、所詮生きている者たちの浅ましい考えに違いはない。

一方で銭のない貧乏人は、河原の石を土饅頭(どまんじゅう)に積むだけだ。ただ、そこに葬られたという目印のために。石屋としてどちらが本当の供養なのかと、歳を重ねるほど、そんな想いは強くなるという。

だからと言ってではない。紺屋の白袴(しろばかま)でもあるが、息子の墓石も河原で手頃なものを見つけてきて、子の名を一字「真」と刻んだだけのものだ。

女が訪ねて来てから、半年もしない夏。栄之助は、また倒れてしまった。何日間かの昏睡状態の後、やつと意識を取り戻したのは、鯛(せみ)がうるさいほど鳴く盆明けの夕刻だった。

だがその後、正気には戻らず、ボケの度合いは日ごとに増すだけで、女房のサキはその世話

で疲れ切っていた。栄之助は、

「俺が悪かった。許してくれ」

と訳の分からぬことを言つたと思うと、ぼつーとして何やら口をしきりにもぐもぐさせるだけであった。やがて家の中といわず歩き回り、昼も夜もない有り様だった。すっかりあの栄之助の頑固な職人の面影は薄れてしまつていた。

秋も深くなろうとする頃、サキが目を離れた隙に栄之助が表通りに独り出て、行方知れずとなつてしまつた。知り合いにも頼み込み、一日中、町なかや川岸(かし)を探し回つた。だが見つかつたのは、翌朝のことだった。かつて栄之助が拵えた有田の地藏堂の脇、草むらに眠るように死んでいたら、サキに知らせが届いたのだ。

サキは、

「あの人は、息子に会いに行つたのかも知れない。最期まで死んだ息子のことを背負つて生きたのかも知れない」

亭主らしい死に様を誇らしくさえ思つた。ただ一つ残念だつた事は、自分が側で看取つてやれなかつたことだが、これもひよつとして己の強欲なのかとも思つた。

栄之助の弔いもつつがなく終え、サキは亭主の意向通り、加工場を誰ぞやに引き受けて頂こうと、石置き場の片づけに入った。

そこで大事そうに厚手の布にくるんだ小さな包みを見つけた。包みを開けて見ると、漬け物石より一回りほど大きめの、まあいい穏やかな石に「正平」とのみ、刻んであった。サキは、これは果たして誰のものかと思いを巡らせた末、

「もしやこの春先、栄之助を訪ねてきた女の亭主の名ではないか」と思った。

北上川を遠く見下ろす小高い墓所に、サキと正平という男の女房が二人立っている。男の土饅頭は、周りの地べたともう少して同じ高さになろうとしている。

女は包みをほどき、そつとその地べたの上に押し置いた。大風でもあれば吹き飛ばされそうな小さな石である。だが女にはことのほか嬉しかった。

「ほんとに、お前さんらしい印を拵えて頂いて。亡くなったご亭主に、何とお礼を言ったらよいか」

としきりに頭を下げる。

サキにとつても嬉しかった。栄之助の最後の仕事だが、何も言わなかったところをみると、まだこれで満足出来兼ねていたのだろうと感じた。栄之助が女の願いを断りながらも、こうしてこつそり刻み残しておいてくれた心持ちと、小さい石にこそ刻み込んだ、栄之助の真意と職人気質を改めて確かめ、感謝した。

キノと正平の女房は、ずいぶんと古くからの顔馴染みのように、まるで母娘のように、この小さな石に手を合わせた。そして二人微笑み寄り添うように墓所を後にした。

杉木立から見下ろす町は、周りの小高い山に囲まれ、包み込まれるような佇まいを見せる。その彼方、北上川が悠々と相も変わらず流れている姿が遠くに見取ることが出来た。

夢は、私の里の風景が広がる情景で途絶えた。この里には、良くて悪くても私に遺伝子を伝えた人たちが土となり眠っている。

穴掘り文中の*印

吉村昭「週刊朝日」(昭和四四年九月号) 直言曲言欄より引用

賑橋渡る

「この女(あま)、どこき目つけてんだ」

賑橋(にぎわいばし)のたもと、雪乃(ゆきの)に罵声(ばせい)が飛ぶ。橋の欄干(らんかん)によるけ、倒れ込む雪乃(ゆきの)の形(なり)と深く被(か)つた菅笠(すげがさ)のその目元(めもと)を覗(のぞ)いて男(おとこ)は、

「ちえつ、お前(まへ)盲目(めくら)か。上玉(うたま)なのによ」

と言(い)い放(は)し、男臭(おとこくさ)さと真(ま)つ昼間(ひるま)から酒(さけ)の匂(にお)いとをさせ、西(にし)の方角(かたがし)に立(た)ち去(い)っていつた。

どうやらこの宿場(しゆくぢやう)は、今(いま)まで雪乃(ゆきの)が巡(めぐ)つた宿場(しゆくぢやう)より大(お)きいらしい。往來(わうらい)のざわめき、荷車(かぐるま)の軋(こ)きしむ音が土埃(つちぼこり)に混(ま)じる。

そんな雑踏(ざつたつ)の中(なか)、放(は)り出(い)した竹杖(たけぢやう)を手探(てをたず)りする。跪(ひざまづ)いた辺(へ)りを紺染(こんぞめ)めの手(て)つ甲(か)を着(き)けた手(て)が探(たず)る。か細(こほ)い指(ゆび)である。全神(ぜんしん)経(けい)を注(つ)いだ指先(ゆびさき)にいくつか石ころ(いしころ)が触(ふ)れた後(のち)、やつと竹杖(たけぢやう)を探(たず)しあて胸元(むねもと)で握(にぎ)りしめた。石造(いしぞう)りの欄干(らんかん)を伝(つた)い、自(みづか)分の位置(いち)を確(た)かめながら怯(おそ)えるように立(た)ち上(あ)がり、この先(ま)どうしたものかと、雪乃(ゆきの)は立(た)ちろいでしまった。

一つ山脈(さんみやく)を越(こ)した宿場(しゆくぢやう)なのに耳障(みみざわり)りな口調(くちてう)、甲高(かたか)い物売(ものうり)りの叫(こゑ)びが軒(のき)々に響(こ)きあい、何(なに)やら喧嘩(けんか)でもしているような異郷(いけい)の町(まち)だ。

この黒沢尻(くろさわじり)、本町(ほんまち)と新町(しんまち)にくさびを刺(さ)すように新道(しんぢやう)が造(ぞう)られ、やがて花街(はなぢやう)や宿場(しゆくぢやう)として繁(さか)る

盛するようになって久しい。この新開地と本町との結界が賑橋にあたる。

雪乃は生まれつきの盲目である。七つの時に追い出されるように雄勝の里を出て、湯沢、横手で三味弾きの修行をした。十五になる今年、鉱山景気で賑わう黒沢尻をめざして、紅葉色の奥羽の山を峠越えし、きのうやつと辿り着いたばかりだ。目明きのトミに引き連れられ、他に姉弟子光枝との三人旅である。

今朝、馬喰宿(ばくろうやど)を出て、トミが光枝を連れてこれからの泊り宿へ挨拶を兼ねて門付けに、若い雪乃は近場の岳駒町(たけこまちょう)辺りを巡れと言いつけられた。一人だけの心もとない足取りだ。

気を取り直して、行くべき方角を探る。手拭いで頬被りはしているが、雪乃の透き通る白い頬が触れる風を読む。その風に導かれるように、一歩ずつ竹杖で足元を探り、確かめ、耳を澄まし歩を進める。慌ただしく通り過ぎる草履(わらじ)や下駄の向うに、木を削る音がする。桶屋であろうか。杉の香りが雪乃の気分をいくらかほぐしてくれる。何やら香ばしい温かそうな匂いも流れる。もう昼間時も近いと。

一瞬、心持ちがうわずった。その時、すでに雪乃は地べたに倒れ込んでいた。またかと思いつつ、ひれ伏しながら、

「申しわけねえ。勘弁してけれ」

と声を掛けたが、雪乃をどやしつける声は返つてこない。座り込んだ目の高さから、

「姉ちゃんごめん。だいじょうぶかい」

年の頃七つ、八つの子供の声だった。雪乃は着物の裾を手で払いながら、ちようどいい、少しだけ腰を下ろせる所をと思った。

「なあ、良かったらどつか休む所、うるさくねえ所に連れてってけろ」

「あゝいいよ。おれさついできて」

子供は一人で先に歩き出した。だが、雪乃が手探りをしていることに気付き、小さな手を雪乃に差し伸べ、つなぎ、引いてくれた。

子供の名は正吉とあった。酒浸りの父親の居所を探してこの賑橋を渡ってきたらしい。女郎屋の店先をうろうろしていたのを店番に嫌がられ、追い出され逃げてきたのだ。

正吉の体が左手にそれた。淡い光と線香の匂いが斑にする。お寺への参道らしい。

「姉ちゃん、どっからきた」

「山の向うからだよ」

「ふーん、雪がいつべえふるとこだべ」

そうだ、雪乃の里は東北でも雪深い。しかし、生まれつき盲目の雪乃は、その雪を一度も見ずして光を失った。ただ、手ですくい取り口に含むと冷っこく、時にはふわつとして、藁靴で踏みしめるとギシッギシッと音がするものだという感触はある。それと、雪の日は臉の

内をいつもより微かに明るくしてくれるものだと思っている。

妙桃寺の境内、正吉は本堂の上がり口に導いた。雪乃は本尊の方角に手を合わせる。

「ありがとう。助かったな」

「そうそう、腹減つてねえか」

馬喰宿で持たせてくれた握飯を正吉に食べさせようと思った。背中の風呂敷包みをほどき、一つだけの握飯を正吉にすすめた。

「いいよ、姉ちゃんのだべ」

正吉は遠慮したが、雪乃は両手で正吉の胸元に差し出した。

「じゃ、半分こして食べような」

正吉は、ありがとうと言い、足をぶらぶらさせながら半分の握飯にかじりついた。小春日和の陽差しの温もりの中、境内のどこかで落葉を燃やす音、流れる煙たさを一緒に口に含んだ。脇の正吉が何気なく口ずさむ。

「お正月はええもんだ」

雪のような、まんまくつて

油のような、酒のんで

てんかばんか、羽子ついて

お正月はええもんだ」

雪乃も小さい頃から覚えてる唄だった。

「にぎりめし、雪みてえだな」

正吉の言葉にはっとした。そして聞いた。

「雪って、どんな色」

正吉は、握飯を食べるのを止めて、どう教えようか迷っているようだ。

「白い、白いんだ。まんまのように」

「白い、白いの。まんまのように」

雪乃は念を押した。

「そうだ、白いんだ。のつこもたんぼも、あたりみんなまっ白にするんだ」

「野つこもたんぼも、みんな真っ白に」

聞き返す雪乃に、正吉はあげられるだけの白いものを思い浮かべた。

「とうふ、わた、まゆ、うさぎ、だいこん」

と言い並べたが、雪乃にはその白が連想できない。ただ分かるのは、豆腐を口にした時の舌触り、綿のふんわりした温さなど、それは色ではなく雪乃が肌で感じるもの、それが雪の色ではない。

「正月、早く来て欲しいの」

雪乃が聞くと、生返事がした。そして、

「父ちゃんよつぱらつて、ぶつからな」

「じゃ、来ない方がいいかな」

「でも白いモチくいてえ。はらいつべえに」

と餅の話になつて二人は微笑み合つた。

通りに戻り別れ際、正吉は雪乃をまじまじ見つめ淋しそうな素振りで、

「おらの妹・幸も、いきてたらなあ」

そう言うのと駆け出していった。

ある旅館らしき店先に立つた。直ぐさま奥から女中が出てきて、脇に連れ出された。素つけない扱いだ。いつもトミが手はずするが、一人ではやはり難しいらしい。

また、通りを西に向けて歩き出して 三、四軒ほど通り過ぎた辺りで、菅笠の上の方から「ちよいと、上がつてくれないか」、粋な声が出た。それは女の声なので意外だった。

暖簾を分けて、下働きの者に手引きされるまま、二階の階段を上つた。白粉や鬢(びん)付け油の甘い匂いがする。場違いな気配を感じながら、廊下のきしむ音を聞いて進んだ。

「お前さん、ずいぶん若いんだね」

「一つやつてくれ。何でもいいさ」

雪乃と言われるままに、手引きされた場所に座り、三味線の袋を解き長唄の一節を始めた。雪乃の三味の音と女が吸う煙草の匂いが、開け放した外に一緒にゆったりと流れていく。遠く離れた座敷からは、女たちの華やぐ声が漏れ伝ってくる。この長唄は、雪乃が弟子入りして一番最初に覚えたものだった。

女がひどく二度三度と咳き込み、キセルを煙草盆に叩きつける頃、長唄を終えた。

「辛いだろうが、せいぜいお気張り」

「ほんの少しだが、下で祝儀貰っていきな」

雪乃は深々とお辞儀をした。有難かった。そして、上げてくれた女の名を訊ねてみた。

「こんな場所での名なんぞ名乗りたくねえ」

とつつけんごんな返事をする。逆に、

「いつそのこと、お前さんのように何もかも見えない方がいいと思う時もあるさ」

「ここから逃げ出したい。そう言っちゃバチが当たるね。お前さんが背負う闇を思えば」

引け際に女は雪乃の里を聞いた。雪乃が里を明かすと、思った通り道理で色白で器量良しな訳だと、女は雪乃をたいそう褒めた。

店の土間に降りると、下働きの者が米をくれると言う。雪乃が差出した木綿の袋に、湯飲み茶碗から「ザー」と一杯の米が注ぎ込まれた。何度も何度も礼を告げた。下働きの者は、この界限より東の方角、本町の方が昔から裕福な店だなが多いとすすめてくれた。

言われるままに、背後からさつき声を掛けてくれた女の視線を感じながら、来た道をまた賑橋の方に取って返すことにした。

トミたちは今頃どうしているだろう。正吉は父親を探し得ただろうか。竹杖の先への注意がちよつとの間怠った。またしても体は地べたに放り出されていた。今度は誰なのか。

「何だ何だ、邪魔じゃねえかい」

「おつ、米っこ散らばしてしまつたな」

今度は人力車に触れたらしい。車夫の声を聞き咄嗟(とつき)に、雪乃は夢中で辺りを手で探り始めた。賑橋の周りに野次馬が集まつてくる。

「まるで雪が降つたようじゃねえか」

「んにゃ、これじゃあられたべ」

そんなあざ笑う声を背にしながら、懸命に米を探った。小石も米も区別がつかない。だが米粒は、今の雪乃が生きていく大事な糧だ。里に降り積もつた雪が解けて、やがて田んぼを潤す。その雪の恵みがこの米粒なのだ。

雪乃は雪の白を、臉の内に思い描く。なぜか温く、それでいて水のようにサラサラこぼれる音に似て、あまりに切なすぎた。知らずと正吉が口ずさんだ唄が聞こえ出し、臉の内からきらきらと雪色に滲んだ。

「お正月はええもんだ

雪のような、まんまくつて

油のような、酒のんで

てんかばんか、羽子ついて

お正月はええもんだ」

二、徒花(あだばな)

「おゆき姉さんの知り合いかい」

早知(さち)の背後からお菊が気たるそうに、ほつれた髪を赤い櫛で梳(と)かしながら、手摺りに体を撞(もた)げ訊ねてきた。お菊に感づかれまいと、

「いや別に……」

できるだけ素っ気ない返答をしてみせた。

「可愛そうな娘だよ。他人のこと言えないけれど、わたしらの方がまだ増しかもね」

お菊の話の聞くでもなく、賑橋（にぎわいばし）の方に視線を戻すと、すでに若い女は家並みに隠れて見えない。山の方から冷たい風がひと舞いしていく。賑橋と逆のその方角を遠く見やると、西山がその艶やかな色を失いつつある。

早知は、さつき声を掛けて座敷に上げた時から、あの若い女が他人ではないような胸騒ぎをしている。ただ、それは確証が持てるほどのことではない。例え、若い女に自分の素性を証したとしても、どうなる話でもない。

早知はここ紅姫楼（こうきろう）で「おゆき」と名乗っている。この宿場の花街に辿り着き三年ほどになる。秋田の土崎にいた頃、早知を随分鼻唄（ひいき）にしてくれた山師が、和賀の鉢山（はちやま）でしばらく仕事があると言い、黒沢尻（くろさわじり）という所に奥羽の山を一緒に越えないかと誘った。早知は山師と峠を越え、この宿場に辿り着いた。

だが、まもなく山師は早知を置き去り、逃げるように行方をくらます。また、売られてしまっていた。ここでも結局、不夜城の徒花に戻ってしまい、まもなく紅姫楼の看板となった。しかし、出来るものなら越えてきた山の向う、早知のすべての過去を、あの白く凍てつく吹雪の下に、ずっとそのまま閉じこめておきたいときえ思っている。

そろそろ雪が舞い降りそうな頃、西山が灰色の雲を被る。手持ちぶたさにお菊と新道を眺めていた。早知らとは世が違う地べたで生きる町衆が絶えることなく行き交う。そんな者たちを脇に追いやり、後ずさりさせ、

「ガンバコ、いらねがー。父チャンがこしえたガンバコ、いらねがー」

男の子供が荷車に歪(いびつ)な箱を荒縄で縛り曳(ひ)いて通る。何やらその歪な箱は棺箱(がんばん)らしい。何とも奇妙で不細工な棺箱である。この頃続く微熱も手伝い、お菊と一緒にからかい、子供に声を掛けてみる。

「おやおや、坊や今日は誰の供養たい」

「あれあれ、不格好なものを曳いてどちらまでかい。地獄それとも極楽かい」

子供は脇目もふらず、往來の者たちから怪訝(げげん)そうな目で見られながらも、

「ガンバコ、いらねがー」

一人押しつぶされそうな声を張り上げている。階下の女中頭クメが表に飛び出し、この荷車めがけて何やら塩を投げつけている。

早知はこの子供に見覚えがある。ちよくちよく父親の居所を探しに新道をうろついては、男衆にどやされているのを見かけたこともある。荷車の棺箱を見下ろし、この歪な桶箱を今入り用としているのは、自分ではないかと感じた。脇にいるお菊は気づいていない。

この宿場に來た頃から咳をするようになり、時としてひどく寝間着も濡らす。この春先か

ら血が混じる痰もする。氣力が失せ、これは胸の病ではと薄々感じている。だが、身寄りのない者にとり、表沙汰にすることは生きる術(すべ)を失うことになる。いずれ、遅からず死期が近いのではないか。早知はいつまで隠せ通せるか、どうしたものかと躊躇(ちゆうちよ)していた。やがて、子供の売る棺箱が自分には必要となる。そんなことを誰にも明かせず、思い浮かべながら、西へと向かう荷車を見やった。

宿場に初雪が降る夕刻、榮吾という男が通されてきた。今日は素面(しらふ)らしい。座敷に上がるなり、細身の早知にまた抱きついてくるのかと思つたが、火鉢に手をかざしながら、「外に出掛けよう。おゆきさんに旨いもん食わせてあげる。この前の罪滅(ぼし)さ」

早知は耳を疑つた。これがあの時と同じ男、男はこうも変るものだろうかとも思つた。

榮吾が初めてここに来たのは、秋風がそろそろ吹き始める頃だ。陽が少し傾き始めたばかりなのに、すでにうつろな眼をし、呂律(ろれつ)も回らぬほどしこたま酔つていた。座敷に通されるなり、何の会釈もなく早知の体に抱きついてきた。早知は榮吾を素手ではねのけ、「何も慌(わ)んでよかろうに。どこに逃げも隠れもしないよ」

そして、少し客として仁義らしいことをしたらどうかねと、怒りつけた。早知にしてみれば、いくら錢を払う客だからといつても遊びの作法があらうにと思つている。はねのけられた榮吾は柱に頭を打ちつけ、不拔けた格好で股間をあらわにした。

「すまねえ」

と言いながら態勢を整えた。だが、榮吾の眼は定まることなく、どこかうつろで、見えな
い何かに確かに怯えているようだった。

「お前さん、顔色がずいぶん悪いよ。一体どうしたんだい」

早知がキセルに煙草を詰め、火を点け一服ふかしてから榮吾に差し出すと、阿片でも吸う
かのように大きく呑み込み、小刻みに震え、やがて幾分落ち着きをみせた。その時、男から
榮吾と名乗った。本当の名だか疑わしい。船頭だとも言った。男山のふもと、岩脇(いわき)
の渡しだそうだった。そうまで明かすには、まんざら嘘でもなさそうだと思つた。榮吾は言う、
「今朝から昼間までかかつて、死人を埋める穴掘りをしてきた」

その死人は、まだ十四、五の娘だと。もうその頃は榮吾が掘つた四角い穴底に埋められ、
土饅頭(どまんじゅう)になつているとも。榮吾は頭を抱え、何にかに憑(とりつ)かれたよう
に一層怯えてみせた。

「穴だ、穴だ、俺の掘つた穴にだ」

「婆さまの髑髏(しやれこうべ)、この手ですくい上げた」

わけの分からないことを喚いていたが、一見やくざ風な男でさえ、死ぬのがことのほか怖
いと見えた。その恐怖に堪りかねて一目散に賑橋を渡つてきたらしかった。

「俺は掘つた、掘つたんだ」

榮吾は早知の色模様の襦袢（じゅばん）をはだけ、股間に浅黒い顔を埋めて叫んだ。やがて廊下越しの夕陽が障子を染め尽くす頃、榮吾は大の字になって高野（たかいびき）をかいていた。

そんな男なのだが、外へ出ようという誘いを断る術もない。女将さんに断りを入れ、久しぶりの町中に出ることにした。榮吾の形（なり）は何処でかすめてきたのか、こざつぱりとした袴（あわせ）に鳥打ち帽だ。早知はこれも商売と、榮吾の腕に思いつき甘えてみせ、賑橋を飛び越えるように渡った。本町と新町の境、丁場を真っ直ぐ東に進むと鍵屋の酒蔵に突き当たる。その脇の路地を抜け、この宿場の守護神である諏訪神社への参道町に出た。榮吾は早知の気持ちを取りなすかのように、

「鍋でも食う前に、お詣りでもしようか」

初めから何か魂胆があるのではと薄々感じていた。男が言い寄ってくる時の匂い、危なそうな気配も嫌と言うほど知りすぎている。

榮吾は脇目使いに、にやけながら、

「おゆきさん、俺と所帯を持たねえか」

やはり案の定、言い寄ってきた。咄嗟（とつさ）に、

「わたしや、ワケありだからお安い女とも思っているのかい」

「ワケあり？ それって何のことだ。余所に誰か男でもいるというワケでもないだろ」

「いや別に。わたしと所帯を持ちたいなんて、随分酔狂な男がいると思つてさ。悪気があつてのことじゃないわよ」

早知がワケありと言つたことが、どうやら通じなかつたようだ。自分でも言い出して少し驚いた。早知も何がワケありかと問われれば言い訳に困る。今さら境遇が別に恥じだとも思ひやしない。町衆に蔑(さげす)まれようと女が一人で生きていくためには、今はこれしかない。そのことより、自分の意志ではどうすることもできない胸の病いだけは、本当にワケありなのかも知れないと改めて思い知つた。

榮吾はそんなことに気づいていない。そんな気配りのできる男でもなさそうだ。ただ、自分の気持ちを受け止めて、慰め、おだててくれる格好の女が欲しい、甘えたいだけである。賑橋を渡つて来る男たちはみんなそうである。思惑と違う二人の話を、えさば屋の黒塗りの自転車が引き裂いた。

「おいおい、道の真ん中じゃ危えぜ。こつちはイキが一番の商売だ。雪が降り出しそうだと
いうのに、熱くては腐つてしまふぜ」

前掛けをした巨漢の男が息を吐き、魚箱を重ね、右に左に体を揺らし突つ切つて行く。この話はひとまず途切れてしまつた。

杉林で囲まれた諏訪神社の境内は、寒々として誰もいない。社殿に向かい、榮吾が十錢玉を賽錢箱に勢いよく放り込む。十錢玉が箱の底に転がる音をかき消すように、鈴を振る。頭上でカラスが喚き回る。それぞれ柏手を打ち、手を合わせた。今さら頼み事などないが、あの時の若い女のこと及早知の頭をかすめた。どうしているのだろうか。早知が手を解くのを待ち、榮吾が早速聞いてくる。

「おゆきさんは何を拝んだんだ」

「別に、おまえさんの知ったことかい」

早知はつつけんどんに言葉を返した。

「俺は、決っているだろう。なあ」

榮吾は肩を寄せ、聞きもしないのに言い寄る。挙句の果て、こう言い出す始末だ。

「所帯のこと、おみくじで占おうぜ」

早知はくだらない話と割り切り、聞き流した。仕方なく榮吾に付合い、社務所で三方に載ったおみくじを引くことにした。榮吾はおみくじを何度も手でかき回し、目を瞑り仰ぐように底の方の一つを引いた。早知はその一番上に飛び出た一つをつまんだ。

せっかちな榮吾が先に開ける。

「何てこつた大凶だ。畜生、最悪だ」

ひどく肩を落としながら、神妙な顔つきになる。今度は早知がおもむろに開く。早知にと

つて運など、もうどうでもいいことである。ところが世の中不思議なもので、それが意外にも大吉と出た。久しく大吉などというものに縁がなかったので、

「どうしよう」

早知も栄吾と同じように戸惑った。早知が引いた大吉のおみくじには、すべて、これからの早知の先行きとは逆さまのことが記されている。まるで早知が引くべきおみくじを栄吾が引いたようだが、運命は変わりそうにもない。早知も社殿の傍らのサワラの大木の枝に、おみくじを小指を立て堅く結んだ。

今一度、社務所の前を過ぎ鳥居を抜けた。途端に早知は、裕の胸元から突き上げてくるなま熱いものを感じた。一瞬気を失い掛けた。口一杯に血の味がした時、すでに血は口から吐き出され、参道の玉砂利を赤く染めていた。

「どう、どうしたんだい」

栄吾は血相を変えておどおどするが、早知は来るべき時が、もうそこまで来ているのかと悟った。地面に吸い込まれ、色が失せていく己の血をいとおしく見続けた。人の運命など、所詮おみくじ如きで変わるなどあるものかと。

三、墨衣(すみごろも)

夕べ遅くちらつき始めた雪が、朝方になり宿場を幻想的な姿に変えた。玉砂利に散った吐血は落葉とともに白く覆われている。初雪の到来である。朝餉(あさげ)支度の煙がそこかしこから立ちのぼり、深い陰影の町が動き出す。

野良犬の足跡しかついていない新道を、墨衣の若い僧が素足のままの草鞋(わらじ)で雪を踏みしめ歩む。手に持つ五鈴(ごこれい)が町筋に凜と響く。師走に入り馬市が始まったせいか、いつもより馬糞の入り混じった土の臭いが、地を這う冷気に押し流され、宿場を漂い充満させる。賑橋の橋のたもと、荒物屋の伏見屋の脇、石造りの蔵の前に立つ。狭い川幅を塞ぐように積もった雪の塊を崩しながら、脇を用水が勢いよく流れる。若い僧の長い影だけが賑橋(にぎわいばし)を斜めに渡りかけている。

網代笠(あじろかき)の先に、幾人もの町衆が白い息を吐き、肩をすぼめて通り過ぎる。まだ頼りけない足元だが道はしだいに広がり固まる。大工道具を担いだ者、大八車に荷を積んだ者、豆腐や油揚げを売り歩く者、葉屋らしき商人、馬喰(ばくろう)に曳(ひ)かれる馬の列、そして鈴音。また朝が早いせいか、女郎屋帰りの優男(やさおとこ)が欠伸(あくび)をしなが

ら日常へと戻る。宿場は天道様のもとで汗する者たちの刻に移りかける。

僧の真佑は生来一人である。三つの頃、川岸(かし)の染黒寺に預けられ、そのまま小僧同然に育てられた。母親は吹雪の時に行き倒れて死んだとしか、住職は教えてくれない。この春、本山での修行を終えて染黒寺に戻って来たばかりだ。まだまだ修行の身には変わりない。こうして寒行に先立ち、師走の托鉢を己に課し、立ち続けているのである。しかし内心、真佑は思う。墨衣をまもつてはいるが、これが己の欲すべきことだったのか。一通り修行を終えたと言えども、相変らず邪念だらけの托鉢である。真佑の足元、踏み固まつた地べたがしだいに解ける。ぶれる気持ちに喝を入れるかのように、草鞋の底から背筋を通し脳天に冷たさが突き刺さる。

道行く者は、誰一人真佑の持つ鉄鉢(てつぱつ)に施しをする者はいない。だが、町衆は真佑の姿を明らかに意識している。ただ、出来るだけ見ぬ振りをし、施しまではせずと行き過ぎる。真佑も僧とはそういう存在なのかも知れないと思うところがある。辻に立つ僧は、ここであくせく暮らす者たちに生きることの果て、その限りあることを暗黙の内に悟らせる目印でさえあればいい。それ以上のことを僧は無理強いて説くべきではないと。

朝間時、職へ向かう慌ただしい往来がひととき途切れる頃、真佑の前を女中頭風な者に抱

きかかえられて通る女がいた。真佑の低い読経に気をとめ立ち止まった。

「ちよいと待つてくれないか」

女は胸元から錢入れを出し、真佑の鉄鉢に十錢玉を数個入れ手を合わせた。女の艶めかしい色香が漂う。今日初めての施しに対し、

「願わくばこの功德をもつてあまねく一切に及ぼし、われらと衆生と皆ともに仏道を成ぜんことを」

と合掌した。女はやつれきつた様子で、血の気は失せ、余計色白に見える。わずかな色香を残しその場を立ち去り賑橋を渡り掛けたが、なぜか真佑の前に再び戻ってきた。網代笠の中を下から覗き込むように女は聞く、

「こんな私でも行けますでしょうか」

そう言われても真佑とて定かではなく、確証が持てない。ただ、女郎らしきこの女は何やらひと山越え、その遠くを見やるような顔つきである。なぜか自ずと導かれて、

「行けますとも」

との返答がついて出た。女はそれを聞き、

「今でも、まだ間に合うのだね」

女はすでに僧である真佑より、遙か遠くの地点に昇華しているような振舞を見せる。返答も待たず女は安堵した様子で合掌し、また女中頭に抱えられ賑橋を渡る。女は二度三度ひど

く咳き込むと賑橋にかがみ込んだ。その後ろ姿を眺めながら、なぜ明確に「これからでも間に合う」との一言を言つてやれぬ己の未熟さを恥じた。幼い頃から寺に育ち、結局そのまま仏門に入ったものの、現実は出家する前とさほど變つていない。身なりだけは僧の姿をしているが、その中身はどれほど變つたのか。日々、湧き出る煩惱との闘いである。

風の向きが變つた。屋根から落ちる雪の音もする。自分の空腹の音も混じる。また、網代笠を覗く者がいる。眼を開けて見ると、継ぎ接ぎだらけの風呂敷包みを背負つた老婆である。

老婆は崩れるような顔をして覗き、

「お坊さま、お坊さま」

と声を掛けてきた。

「何かご用でもありますかな」

落ち着き払つた声を返すと、老婆は見て欲しいものがあると言う。風呂敷包みを両腕の上ほどこぎ、差し出して見せた。それは何本もの位牌であり、大層古い位牌も混じる。

「この位牌がどうしたのかな」

老婆はこの位牌をどうすれば良いかと聞く。話によれば、先祖代々の位牌らしい。家を継ぐ者も途絶えて、老婆だけがこの歳になつても生きながらえていると言う。家屋敷も剥ぎ取られ、死に場所の在所も失い、今となつては先祖たちの位牌のみで、こうして赤子のように

背負い放浪しているのだと言う。

「ほどほどくたびれ申した。お迎えも来ず、さりとて位牌守りもできそうにない」

涙混じりに老婆は行き先を問う。だが真佑とて老婆に示すことは出来ない。ただ、生まれ落ちた時から、持った定命があるとしたら、その限りある日々を生きてゆけとしか言いようがない。あの世も極楽さえ、その先にしか存在しないのだからと。それを聞かずとも、老婆も何やら真佑が当てにならずとみえて、

「もう、ええ。お坊さまも頼りにならん。地獄の沙汰も金次第と言うからな」

老婆はそう真佑に吐き捨て、風呂敷包みを背負い、賑橋を渡り西の方に去って行った。真佑は坊主としての度量の狭さを悔いた。自分は何のためにこうして立ちつくすのか、再び惑い、ひとつ溜息をついた。

行を終えようとする頃、影はすでに背後の蔵に移っていた。橋のたもとを去ろうとすると、墨衣の裾を両手で強く引かれた。身なりの汚い男の子供だが、正吉と言った。

「なんじゃな」

問うと子供らしくないことを聞いてくる。

「妹に会うにはどうすればいい」

亡くなった一つ年下の妹に会いたいと言う。真佑でなくとも、子供にどう教えようか正直

のところ迷う。型どおりの話を聞かせる。

「お前の妹はな、もう仏様になつてゐる。いつもお前の直そばにゐるではないか」

正吉はきよとんとして瞬に落ちない。しきりに辺りを見回し探す。当たり前のことだ。

「おらにはどこにも見えねえ。お坊さまには本当に見えなざるのか」

真佑は心の眼で見れば、いつでもお前の胸の内に見えるのではないかと、憎らしい返答を試してみた。それでも納得せず、

「おら、そんなことでたまされね。妹のところを会いに行きたいだけだ」

そう言われると仕方ない。ここまでせがむのだからと、真佑も覚悟を決めた。網代笠を取り、身をかがめ諭すように、

「いいかい、それは死んでしまうことだよ。それでもいいのかな。分るだろう」

正吉は少しうつむいたが、こう切り返す。「ホントだべ。死ねば会えるのだな」

今にも死に行くというような素振りをみせる。真佑とてそれは困る。命を軽々しく奪うような、仏の道に背く教えは出来まいと返答にためらつていた。正吉はそれではと、

「そしたらお坊さんになれば、死ななくても妹に会えるのか」

いや、そうとも限らぬ。未だ迷える己自身を顧み更に返答に困つた。すかさず、

「何だ、お坊さまでもそんなこと分らないのか。くそ坊主だな」

そう言われて少し癪にさわつたが、もう、正吉は雪解けの泥んこ道を丁場の方角に駆け出

していた。正直、子供に一本も二本も取られた感じだった。「糞坊主か」、この言葉を幾度も真佑は胸の中で反芻してみた。

年が明け、まだ松の内だが賑橋は普段以上にこった返す。この昼夜問わずの喧嘩の中、あの女は七草粥を少し口にしかただけで、赤い蒲団の上で息を引き取った。それを待つかのよう
に降り始めたぼた雪は、宿場の何もかもを覆い尽くすような大雪となった。

喜六の菓子

一、初雪

すつーと、隙間風が首筋を抜けた。

喜六が頭を擡（もた）げると、店の縦格子の内側、障子の隙間の先に門付けかと思う女の影があった。今朝方舞い降りた初雪をのせた家並みを背に、その影がたじろいでいる。

手元に視線を戻し、払げた紙に紅色を差す。なかなかこれぞと思うような図案は描けない。喜六の心持ちが、これといって定まっていけないのである。絵筆を止め、ひとつ溜息を落とし、また縦格子の向うを見やる。すでに女の影はそこにはない。

二畳の小上がり、平机の脇で火鉢の鉄瓶がシユンシユンと滾（たぎ）る。平机に紺地の襦袢（ど）てらの両肘をつき、縦格子の間から、筋向かいの屋根を越え、ぼんやり眺める。うつすら白くなった木守菓子のような柿が、喜六の眼中を朱に埋め尽くす。

店の背後、土間づたいに少し湿った勝ち気な下駄の音が近づく。

「お前さん、今しがた誰か来なかつたかい」

割烹着姿の女房世津が、その裾で手を拭きながら店に顔を出した。

「う、うん。んにゃ、誰も来やしない」

一坪半ほどの店の土間に立ち、表を見やる世津に、喜六は上の空で返答をした。

「そうかい。それならいいけれど」

土間と小上がりを仕切るように置かれた見世棚（みせだな）。その上つ面を指で撫でるように確かめながら、

「あまり店にばかり閉じ籠もつていても、いいものが浮かばないのでは」

世津の言葉に、なおも喜六は上の空だ。世津は店の表戸を開け、外を覗く。世津の黒足袋の間を抜けて、ひんやりした空気が土間に流れ込む。暖簾をわずかに揺らした。

「雪に足跡が」

喜六はその言葉に、

「そういえば、誰かが来ていたような気もするな」

独り言のようにつぶやいた。

「誰だつたらうね」

怪訝（けげん）そうに世津が、割烹着の袖を手の甲に引き寄せ、手を摺り合せながら表戸を閉めた。

「まっ、用事のある客ではないさ。今の時期、注文に来る客なんぞないだろう」

喜六は、さつき見た女の影のことはもう眼中にない。思い起こす余地すらなさそうである。

ほつれた襟足の髪を撫でながら、

「あまり根を詰めないでくださいよ」

世津は少し皮肉つぽく声を掛けた。それから、茶色の地に小さく「喜六」と染め抜かれた潜り暖簾を分けて、奥の勝手場へと続く土間に姿を消した。

喜六は和菓子職人である。宿場町であるこの黒沢尻で商いをするようになり、早いもので十年ほどになる。里は宿場の南端を流れる和賀川を渡り、一里ほど先の本郷と言う。ひと昔で言えば、関所を越えて伊達領に入り、程ない街道沿いの在の百姓屋だ。

この仕事のとっかかりは喜六が十五の時で、黒沢尻本町にある丸重という団子や餅を拵(こしら)える店の下働きに入ったことである。母親は実のこと、大工か左官にさせたいと考えていた。伊達領の気仙は、全国から引く手数多(あまた)で腕の達つ職人をずいぶんと輩出していた。だが、女兄弟の多い中で育つた喜六は、そうした荒つぽい職人肌の仕事にとても端(はな)からなじめそうもなかった。

丸重では、親方に頭越しに怒られながらも、一通り仕事を覚えるのにさほど歳月はかからなかった。仕事を覚え始めると、手前(てめえ)のしていることより周りのことがなぜか良く見えた。彩り鮮やかな和菓子の方に興味が惹かれた。しかし、丸重の親方の手前、この宿場内の余所の店で和菓子の修業をすることは出来かねていた。

十七になって堪り兼ね、母親の言うことも聞かず盛岡に出ることにした。母親はもう少し辛抱さえすれば、今の仕事も良くなると言い、なだめもした。来る日も来る日も昔通り団子

や餅だけを拵えている丸重、その時代遅れとも思える商いに嫌気がさしたことも、喜六をそうさせた。丸重の旦那は、何も言わず「いつでも戻ってきたい時は、遠慮するな」と言いもしたが、若い者はこれだからと半ば諦めてもいた。

南部藩の城下であつた盛岡。城跡間近の内丸にある黄鶴堂(こうかくどう)で、五年ほど和菓子 materials の調査の仕方や拵え方などを仕込まれた。河南の中ノ橋や紺屋町の通りに建つ八イカラな建物、その幾つかの店先にはカステラやクッキーなど、洋菓子が並び始めていた。一緒に働く職人達は、口々にこれからのご時勢は洋菓子だと言い、喜六のように和菓子を熱心に修業することはしなかつた。

喜六が拵えた和菓子が、黄鶴堂の店棚にわずかながら並ぶようになり始めた頃、二十三になつた秋。一つ年上の世津と一緒になるのを機に、黒沢尻に戻り店を持つことにした。黄鶴堂の店主は、ずっと店で手伝つてくれないかと強く引き止めもした。だが、喜六は早く手前が拵える菓子を売りたい、食べてもらいたいので、行く先々の事を大層な事と考えもしなかつた。手前が店で立働く姿だけが先走りした。結果として暖簾分けなどというものではない。それが無鉄砲な独り立ちの商い、以後続く貧乏の始まりともなつた。

喜六は店の道具などのことも考え合わせ、和菓子一本に絞つたが、小さな宿場町での和菓子の需要、とりわけ生菓子のお客は限られもしていた。小さい頃から貧乏所帯の実家で育つた世津にさえ、そんなこともあり、

「お前さんと所帯を持って、初めて貧乏を味わった」

と言わせるほど、食うこと、店を何とか維持することで精一杯の日々がずっと続いている。

喜六の店は花屋町に、間口二間、奥行き五間ほどの長屋造りの町屋を借りたものだ。主に注文を受けて拵える、いわば作り置きのお店をしない商いである。宿場の同業者は陰で「若造のくせに生意気だ」とか、「盛岡で修業したらしいが、南部の殿様商売だ」と言う声がしないでもない。それは、同業者に挨拶に顔を出すこともなく、未だ菓子業者の会合にも組み合っていないせいでもある。

近くに二つの寺を控えた花屋町は、もとの名、茶毘(たび)が変じてタミ町と呼ばれもし、花屋、仏具屋、あんま、そして現世と来世を行き来するかのよう語り伝える巫女なども住む。春、秋の彼岸や盆時には、喜六の店先も幾分賑わいをみせる。しかし、一方でこの頃では、明治天皇崩御により大正と年号も変わり、滋養を謳い文句にする洋菓子が、この宿場町でさえ持て囃(は)やされている。西山の鉢山開発により余所から入り込んだ者たちが、一段と洋菓子の需要を伸ばしている。大した稼ぎもない喜六の商いは、そのためさらに一層落ち込みを見せている。

そんな事情もあり表に面した店で、新しい菓子をどうしたものかと、その姿や形をあれこれと思案し、描き悩んでいる。元々絵どころのある喜六は、新しいものを拵える時は、こう

して図案を先に描いてみることにしている。その図案は土間の見世棚に見本絵として大事に飾っており、その見本絵を譲つて欲しいと言う客がいるほどでもある。

喜六の拵える菓子には、その色づかいと形に評判がいい。「さすが、垢抜けしている」と褒められもする。だが、多くは拵えることができない。第一、作り置きがきかない生菓子が大半である。季節によりその売り上げは大きく動く。その日、時々天候にも左右される。彼岸時、少しでも店先で商いになればと拵えるが、拵えた数すべてがさばけるとも限らない。砂糖や小豆など材料の仕入れ値を考えると、喜六の手間代、材料代にすらならないことも多い。職人や下働きを置かず世津と二人で切り回しして、何とか食っているのが内情である。

二、古狸

近くの西覚寺の銀杏の葉が散り終え、あの初雪が降りてから数日後。昼下がりにその西覚寺の和尚が、

「折り入って相談がある。ちよいと邪魔しますよ」

突然、喜六の店を訪ねてきた。喜六の所帯では仏さんを未だ持たない。当然ながら檀家でさえない。店の上櫃(あがりかまち)に横座りして、和尚は妙に親しげに話を切り出し始めた。

「なあ、喜六さんよ、法事菓子を手拵(こしら)えてみないか。どうかな」

法事菓子といえ、大概落雁(らくがん)や饅頭と決っている。喜六にしてみれば造作のないものな筈だと、和尚は話を持ちかけた。

唐突な話に、喜六は和尚の話を訝(いぶか)った。何で手前(てまえ)の処なのか、このような小商いの店に。寺の近くにあるというだけで話を持ち込む筈がないと、話を半分に聞き流す。生返事を続ける喜六に、なおも和尚は一層熱をおび、説得に入る。

「お前さんの気性だから、早々合点がいかないかも知れない。じゃがな、煎じ詰めれば尊い仏さんへの供養じゃないか」

「わしもお前さんも、いや、この世に生まれた者はすべてお迎えが来るんじや。だから、葬儀屋も要るし、わしのような坊主も要る」
となれば、法事菓子もその通り大切だ。そうしたお陰があつて花屋町も生まれ、出来た通りだ。皆がそれで飯にありついている」

和尚はさらに話を事の真意に導く。

「いつ何時死人が出るか分からんが、出たら出たで葬式、四十九日、一回忌、三回忌と続く。

世間様が仏心さえあれば、黙って座つていても向うからやつて来る商いではないか」

喜六に手を差し延べ、和尚と組もうと言う。和尚は、凶らずも供養と言いつつ、商いと言
い漏らす。喜六は、法衣の下の化けの皮が剥がれそうになったと思つた。

巷では和尚は西覚寺の住職を錢で買ったという噂さえあり、寺務めの他にも、何かと脇で
人助け、慈善だと言ひ錢儲けを手広くしている。この宿場町には、川岸、角町、そしてこの
花屋町に西覚寺の他に一つと、合わせて四つの寺がある。どの寺も古い創建であるが、寺を
維持していくことは殊更(ことさら)容易ではないご時勢となつてゐる。そんな訳もあつての
ことだと喜六は思つた。

話を聞き出すと、なかなか断ることは難しくなる。だが、これ以上関わりたくない話に深
入りすることも出来ぬ。喜六はやつと重い口を開いた。

「和尚さんのお話は有難いことです。しかし、女房と二人の切り盛りですから、百、二百と
いった数の菓子や、手早く拵え、お納めすることは、到底今の構えでは出来かねます」

そう言う喜六の返答を無理矢理封じ、

「そんなことは言わず、少しは店を拡げて、下働きも雇ひ、すれば直ぐ元は取れると思うが
な。何となれば、その元手をわしが都合してもいいときえ思つてゐる」

「ななに、檀家に納めてくれた代金の二割ほど、寺に布施の名目として寄進してくれば利
息は金輪際要らぬ。ある時払いの催促なしだ」

思つた通りであると、本音がとうとう表れたと喜六は思つた。手のいい金貸し、ピンはね

としか言いようがない。喜六とて商いを考えれば、寄れば大樹の陰で、少しは楽になる話である。これが先々の商いを大きくしていく采配とも承知している。だが、この話を受けてしまつと、仏への供養というだけの名を借りた手のいいサギ師の片棒を担ぐことにもなる。一人娘、由梨のこれからのこともあるが、この話はきつぱり断ることにした。

喜六のそつけない返答で、和尚は手に掴みかけた獲物を取り逃がした。和尚には、相手は小者であればあるほど、口惜しさは増す。

「そうかい、惜しいな。それじゃこの話は、別の者に掛けても異存はないな。後で頼み込んで来ても、もう無理はききませぬぞ」

と、何やらヤクザのような脅し文句を吐き捨ててみせる。冷めた茶を一気にすすり、ろくに会釈もせず表戸をきつく閉め、何やらブツブツ言いながら店から立ち去つた。

そんな険悪な様子に、裏から世津が慌てて店に出てきた。和尚の話を隣の作業場で聞入つていたのだ。

「お前さん、和尚さんを怒らせてしまつていいのかい」

「あんな古狸の話なんぞ、どこのどいつも請け負うもんか」

「私も胡散(うさん)臭い話だとは思つたけど」

喜六は和尚が帰つてから、持ち込んできた話をよけい腹立たしく感じている。思い起こすと、なかなか気持ちの高ぶりが収まらない。平机の上、描きかけの紙を丸め込み、屑籠に放

った。勢い余り、紙屑は逸れて土間に転げ落ちていく。

その喜六の気持ちに水を差すように、世津が恐る恐る切り出す。前からいつ聞こうかと思つていたことであつた。

「お前さん、年は越せるんですか」

世津のこの言葉は、喜六を再び現実に取り戻す。喜六とて一番気掛りなことである。いつもこの時期になると、始終頭の隅にある。言われるまでもなく、何とかしなくては、何とかなるのではと日数を重ねている。喉から手が出そうな話も断つてしまつたばかりである。喜六も手前はいいとしても、女房と娘に正月の真似事ぐらいさせてあげたい。そう思う亭主としての気構えだけはあるにはある。

「うん、何とかなるさ」

また、意に反した返答をしてしまう。心配をさせまいとする喜六なりの心配りなのだが、よけい世津にとつては心細く感じる返答に聞こえた。土間に転げ落ちた紙屑を拾い上げ、シワを伸ばしながら、亭主をこれ以上萎えさせまいと、

「それじゃ、しつかり頼みましたよ。いい正月が来るようにね」

励ます心遣いのつもりが、かえつて喜六への重荷となる声を掛けてしまう。世津が伸ばした紙には、一輪の梅の花が描きかけてあつた。

女房にいい返答はしてみたものの、喜六にとり確かなあてなどある筈がない。金策に走るくらいなら、蒲団をおつかぶり膝を抱え、ひもじい格好をしていた方がまだ増したとさえ思う。だが、今はそんなことが言える独り身ではない。

再び、平机を前に座り込む。目の前に溶いた皿の絵の具が固まりかけている。世津の話で、すでに凶案を描く心持ちの余裕は失せた。今まで凶案を描いていた紙を横にやり、脇戸棚から半紙の束を取り出す。筆を取り換え、襦袍(どてら)の袖をまくり、勢いよく鶴、亀、豊年などと、殊更(ことさら)目出度い菓子の名と値を書き並べる。その脇に正月を迎えるにあたっての口上をしたため、和菓子・喜六という文字で締つ括る。

嫌というほど何枚も書く。小上がりの周りは半紙で埋まり、立ち上がる踏み場もない。終いには世津も見かねて、半紙の乾かしと始末を手伝う羽目となる。そんな世津が想い出すようにぼつりと言う。

「この商いを始めた時も、こうしたものだったね。いくら配っても、注文は来ないし、くたびれ損^じだつたけれど」

確かにそうである。喜六が手前の商いを知らせようと拵えた品書きは、手前(てめえ)たちの商いへの心持ちを満たすだけで、直接それがきつかけで声が掛かることなどまずはなかつた。ただ、「商いを続けていくぞ、いかねば」という意志だけは、人一倍強くなる思いはしたものだ。しかし、商いは人様に知ってもらい、買って頂いて幾らの世の中であることも承知

している。その上での夫婦の悪戦苦闘なのである。背に腹は代えられぬ年の瀬が近づこうと
していた。

三、貧乏神

奥羽の山々が雪を抱いている。里はこの前初雪が見舞つて以来、冬とは思えぬ穏やかな年
の瀬が続いている。

どうする手立てもなく、喜六は黒い角袖を羽織り、先頃拵(こしら)えた品書きを拾(あわせ)
の胸元に入れ、久しくご無沙汰している町場の得意先に挨拶まわりに出掛けた。本町の通り
の数ある店には、店仕舞いをしているところも数軒見受けられる。ほんの先頃まであった店
も、その屋体でさえ姿を消し、「はて、ここはどんな店だなであったのか」、思い起こすこと
さえできぬ有り様である。人の記憶とは、このように不確かで頼りないものだ。手前(てめ
え)のところの店も閉じてしまえば、やがて程なく忘れ去られてしまうのだろう。喜六はどう

しようもない寂しさを抱き、寒さに首をすくめた。

川原町の松並木を抜ける。四十二年橋を渡ろうかどうか喜六はそこで迷った。当然ながらこんな時、母親の居る本郷まで足をのばすつもりは毛頭ない。九年橋のたもとの休み屋に顔を出そうか。いや、どうせ閉じてしまいうような店ではないか、と思いためらつていた。そこは、喜六がまだ丸重の下働きの頃、団子を風呂敷に包み配達させられた店である。橋のたもとですいぶん迷った挙句、「商売にはならないが、この際声だけは掛けていこう」と思い直し、橋を渡る。

店はすでに雪囲いをしている。どう見ても客を迎え入れるような構えではない。喜六は水引暖簾が下がる重い表戸を開け、奥に「居らんしたが」と、声を掛けた。

しばらく返答がしない。しかし、何やら奥の方で物音がする。おそらく、ツネ婆は耳が遠くなり聞こえないのだと、喜六は少し奥を覗き込むように、今一度声を掛けて見る。

「ツネ婆さま、居らんしたが」

やつと気付いたようだ。薄暗い奥から、板間をきび藁草履（わらぞうり）を履いたツネ婆が姿を現わす。くの字に腰も曲がっている。だが相変らず、手拭いを頬つ被りしてのモンペ姿である。皺くちやの顔が喜六に問う。

「お前さま、どちらの誰でがんす」

といきなりの返答である。

「丸重で稼いでいた喜六です。ツネ婆さま、実(まめ)でしたか」

喜六がそう言うが、半分分かったような、そうでないような浮かぬ顔つきをしてみせる。このところ、しばらく顔を出していないのだ。

「そうが、喜六が。さっぱりど顔見せなかつたな」

本当かどうか分らぬが、話は通じたようである。確かめるように声高に、

「ツネ婆さまも、まだ実で店続けられて何よりです。変りないかと寄つたところですよ」

なかなか耳が遠いようで、聞き分けるのもやつこのことのようにだ。その返答は喜六の話とまったく噛み合わない。仕方なくそれでも愛想よく相槌を打つと、

「家の鬼嫁っこ、まんま食わせね。倅(せがれ)ときたら博打ばかりして借金をこさえて、あげくの果てはこのところ家さも寄りつかね」

と、聞きもしない愚痴話に飛んでしまう有り様である。ツネ婆は、ただ口をもぐもぐさせ、泡を溜め独り語りを続ける。そして、また正気に戻つたように聞き返して来る。

「ところでお前、今どこに居る。何して稼いでいる。嫁っこは貰つたが」

いつもの通り同じ事を一通り返答する。だが、またもやツネ婆の頭のトンチンカンが巡り出す。喜六はもう仕方がないと、一方的に話を断ち切り、上がり口から立とうとした。その時意外にも、

「年寄りの話、しつかりど聞くもんだ」

と喜六をぎつと睨む。それにはさすが喜六も気がひける。ツネ婆のちんぷんかんぷんな話、年寄りの話を聞く余裕すらない、持てない喜六でもあった。

そう言えば喜六が若い時分、丸重の親方からこう言われもした。その時はずいぶん理屈めいた話だと聞き流していた。

「商いというものはな、ただ物を売ればいいというものでもないぞ。はじめに客の気持ち、欲を逆に引き取つてあげることだ」

それらは元手も要らず、心底客の話し相手になることで事足りるのだと言われた。また、商いは客の強欲とわし等が拵える物との、いわば欲と物との取り換えなのだ。

「いいか、決して物だけ売ろうとするな」

なぜかこの言葉が今となり思い起こされる。

商いがうまくいかない時、どうしても売れないことだけ考える。それは客の心持ちを汲む、逆に買い取るほどの余裕が必要なのだ、この場に及び丸重の親方の戒めが、やつと喜六は分り掛けたような気がした。

喜六はツネ婆の話を、この際とことん聞こうと腹を括る。ツネ婆は語り始めた。

「なあ喜六よ、この婆様も八十の坂を越えたぞ。長いこと娑婆に居れば、いいことも悪いことも、一杯あるというものだ」

「今のお前さんのように、しょんぼりどした格好では、絶対に客なんぞ寄りつかねえぞ。まるで、貧乏神を背負つて歩いているようだがな」

喜六は正気に戻つたツネ婆の話にドキつとした。そんな喜六を見透かしたように、

「喜六、後向け。そしてその貧乏神、この婆様さ渡せ。そんなものこき置いていけ」

喜六は、またまたツネ婆が狂つたと思う。そんなことに構わずツネ婆は、

「さあさあ、貧乏神様、こちらさどうぞおでつて下さい。この婆様が精一杯お持てなしをして差し上げます」

「なーに、この家や少しばかりの銭つこは、もうすぐお迎えが来るあの世になど背負つていかれません。かと言つて、穀潰しの倅や鬼嫁などには、これっぽちも残したくごさいません」

「みんな貧乏神様、あなた様に差し上げます。どうか心ゆくまで、ごゆつくりしていつて下されませ」

ツネ婆のこの独り語りには、喜六は何も言葉を挟めない。皺で埋まつた目鼻立ちが阿弥陀様のような穏やかな顔つきに変わり、赤子を抱き、あやすような仕草を見せる。

そして今度は、

「さつさど帰れ。貧乏神の気が変わらないうちに、さつさど行きなされ」

と喜六を怒鳴りつけた。更に追い打ちを掛けるように忠告を言い渡す。

「貧乏神、居なくなつたと思つて油断するんじゃないやねえぞ。この前もこの婆様の忠告聞きもせず、馬車鉄に轆(ひ)かれて死んだ下駄屋がおるぞ。気付けていきなされ」

喜六は追い出されるように表に出た。店を振り返ると、確かにツネ婆の休み屋は今にも潰れそうだ。貧乏神の居心地のよさそうな屋体骨であつた。

表に出ると喜六の背中が何となく軽い。心持ちが晴れ晴れしくなつた。大吉を引き当てた時のような気分でもある。「いやいや、下駄屋の二の舞は踏んではならない」とツネ婆の戒めを独り言した。西山から川沿いに冷たい風が下りて舞つた。木枯らしは男山の方に駆け下つていく。

雷(いかづち)神社の前、馬車鉄の軌道を喜六は無事何事もなく越えた。黒沢尻と横手、一つ山脈を越した間に鉄道が敷かれると聞く。そうすればやがて馬車鉄はなくなる憂き目となる筈である。

四、道楽

夕支度の煙で少し蒼白くかすみ出す新町に入る。緩やかな坂を喜六は上がる。幾度かの大火にあつたこの家並みにも電燈が引かれるのが間近い。古着屋などが軒を連ねる辺り、理想閣書店を過ぎる。狭い川幅の広瀬川に架かる広瀬橋のたもと、喜六が商売の材料を仕入れている八重萬がある。八重萬の筋向かいは、かつてこの宿場の一方の脇本陣を務めていた。今はえさば屋の田浦屋として店を構えている。八重萬は、粉ひき、製粉類ばかりでなく、米、味噌、塩、そして薪や炭を商っている。加えて店主清兵衛の道楽で、お茶と瀬戸物や漆器も構えを別にして置いている。三代目である清兵衛は、そろそろ隠居の歳である。もともと八重萬は、南部の米蔵があり積み出しの港であつた川岸(かし)にゆかりのある家筋である。

喜六は軽く会釈をして、荒物を並べてある棚を覗く。これといった専用のものが棚に取り揃えられているわけではない。喜六の作業、案配に合う道具をいろんな店で探す。時には荒物屋を覗いてもみる。また、鍛冶町の指物師や器用な大工に拵(こしら)えてもらうこともある。丸重の親方は、

「道具なんぞで仕事をするんじゃねえ。腕だ」

とよく言いました。やはり最低限の道具、手に馴染む使い勝手のいい道具は、熟練した腕に優るとも劣るものではない。逆に道具をどう使いこなすかが、職人の技量だとも喜六は考えるようになった。

朴で出来た木杓子やフルイを手に取って見ていると、店主の清兵衛がにこやかに喜六のそばに寄ってくる。木綿の袴(あわせ)に、丸に萬の字が染め抜かれた深い紺地の前掛けをきりと付け、いつもながら感心するばかりの腰の低さで、

「毎度ご鼻頂(ひいき)頂いて、有り難うございます」

根っからの商人らしい声を掛ける。

「少し見させて頂いています」

「どうぞどうぞ、ごゆっくり。入り用なものがあれば遠慮なく番頭に言いつけて下さい」

「喜六さんはご商売も繁盛でしょう。腕がおりになるから」

と言いつ終えると、店の表の方を見渡し、何やら番頭たちに指図する。また別の客に低く腰をかがめる。八重萬はこの清兵衛の物腰の良さで繁盛している。ひととおり店を巡ると喜六の処に戻り、

「お急ぎでなかつたら、一服でもしていつて下さい。さあさあ奥へどうぞ、ご遠慮なく」

店の奥へと喜六を誘う。喜六も清兵衛の言葉に甘え、店と奥とを仕切る暖簾をくぐることにした。

土間と座敷の磨き込まれた仕切板に喜六は腰を掛けた。土間づたいに中庭が広がり、その奥に土蔵と白壁の蔵が二、三棟見え隠れする。手の行き届いた普請である。

先代の写真が長押（なげし）に掛けられた座敷、設（しつら）えてある火鉢の鉄瓶の湯で、清兵衛はお茶を丁寧（ていねい）に注ぐ。穏やか（おだやか）でゆったりした気配（きはい）が茶の匂（におい）とともに漂（もよほ）う。この穏やかさは清兵衛（せいべいゑい）の人柄（にんがら）や振る舞（まゐ）いから、醸（か）み出（だ）されるのであるうと喜六（きりく）も察（さ）する。おそらく何不自由（こゝろづかい）なく暮（く）らすことができるからだろうとも。

「さあ、どうぞ」

差し出された湯飲み茶碗（ちawan）にも、さすが道楽（だんがく）とはいえ、喜六（きりく）にさえその目利（めり）きの良（よ）さが伝（つ）わる。湯飲み茶碗（ちawan）を両手（りょうて）で抱（か）き、清兵衛（せいべいゑい）がにこやかに一緒に庭木（にわぎ）を眺（なが）めながら、

「なあ喜六（きりく）さん。何（なに）だか今日（けふ）のお前（まへ）さんは優（やさ）しそうな顔（かほ）つきに見（み）えますが、何か（なに）いいことでもおありになりましたかね」

「あゝ、そうですね。別に大（おほ）したことなどありませんが……」

喜六（きりく）がそう返答（へんた）してから、ひよつとして川原町（かわらまち）のツネ婆（つねば）のことかと思（おも）った。笑（わら）われそうだが貧乏神（ひんぱんがみ）の話（はなし）を清兵衛（せいべいゑい）にかいつまんで話（はなし）を試（こ）してみた。すると、

「そうですね。それはいいことをして頂（たま）いた。ツネ婆（つねば）さまは、本当に働（はたら）き者（もの）でしてね、誰（たれ）にも面（おも）倒（た）見（み）のいい婆（ば）さまです。けれど倅（せがれ）たちが遊（あそ）び人で借財（かぢざい）を拵（も）えて、あの歳（とし）になつても本当に苦勞（くらう）が絶（た）えない」

「今（いま）にも潰（つぶ）れそうな有（あ）り様（さま）でした」

「そうですね。それは致（いた）し方（かた）ないなあ。このご時勢（ときせい）がら何（なに）ともしようがない。わしの処（ところ）も

わしで三代目です。三代目は石潰しの道楽者で、屋体を潰すと昔からみんなが言います。わしの道楽ぶりをみて、きつと陰でそう言っているに違いありません」

と清兵衛が話す。続けて八重萬の内情を穏やかに話して聞かせる。

「うちも大変です。このような大きな店構えをしていますが、それを維持していくことは、並大抵のことではありません。しかし、それをおかないと、八重萬の商いがおぼつかないとか、傾き始めたなどと、噂が一晩でこの狭い町を駆けめぐります。その噂が実に怖いんです」

喜六のように小さい商いも大変だが、大きな商いをすればするだけ、それ相応の銭も動くが掛かりがかかるという事らしい。

「ところで喜六さんこの商いはどうですか。町でも評判がいいと聞いていますが」
言われて返答に喜六は困った。

「それがその、評判と商いが成り立つというのは別の事のように」

「そうですかい。やはり大変ですか」

喜六は先頃あつた西覚寺の和尚の話で清兵衛ならどう思うか、この際だから思い切つて打ち明けてみた。

「そうだ、そうだ。西覚寺の和尚がこの前ぶらりと立ち寄つた時、喜六さんに意ともあつてなく断られたと言つていた。そんなことがあつたのですか。そうですかい」

清兵衛は茶を入れ直しながら、商いの難しさを喜六にとつとつと話し続ける。

「喜六さん、あなたも苦勞していなさるようだから言いますが、このわしにも心を痛めていることがあるんです」

「えっ、八重萬さんも。ご立派な商いをなさってるのに」

喜六は、意外だった。清兵衛が心を痛めているという話に身をのりだした。

「わしの処は、炭や薪も手広く扱っています。それはあの西山から切り出したものです。喜六さんも分かるように、少しずつ西山が白く、いやあれば伐採した痕だが、ハゲ山になりつつあります」

「わしは長いこと道楽と言われようが、この町の、里の草木や地誌に関心が強く、その大切さを町の人達に訴え掛けもしてきました」

「だが、生業（なりわい）と言え、西山をハゲ山にしている張本人の一人でもあるのです。それで商いをし、こうしてのうのと食っているとも言えます」

清兵衛の話に喜六は合点がいった。そういえば西山に近頃斑（まだら）模様の雪形が見える。直接、清兵衛が山を買い、切り倒している訳ではないが、清兵衛はそれに加担していることに深く心を痛めている。

「みんな商いをするということは、そうした罪や業（ごう）を背負いながら、それでもなお何かに役立ちたいと思つてやつているのですがね」

「決して、毎日毎日の目先の一銭を邪険、おろそかにする訳ではありませんが、目先を上げて少しだけ先のことを見据えながら商う、飽きないで商うことが肝要のようですね。いやいや、釈迦に説法だったかな」

と清兵衛は話を結んだ。

「いや、何のその、今の手前(てめえ)もそんなことで悩んでおります。この先、商いをどうしたらよいものか。手前の思ったような商いをすべきか、食うことを第一にすべきか。正直悩んでおります」

喜六も清兵衛の話を聞き、今の心境を正直に吐露した。

庭先も少しだけ蒼白くなりかけている。喜六はそろそろ札を言つて立とうとした。そんな喜六に清兵衛は、思い出したかのような素振りを見せ、膝を一つ叩いて言う。

「そうだ。わしの頼みを是非とも聞いてくれませんか」

「いやいや、そう時間はとらせまい。他の話をしてしまい、肝心な事を話さないで喜六さんを帰してしまふところでした。老いると、こうだから厄介者と言われます」

そう言われて喜六は腰掛け直した。そして、清兵衛がどんな頼みがあるのかと思つたが、喜六には思いあたる節などなかった。

「頼みとは、正月の初釜の菓子を喜六さんのところで拵えて欲しいのです。駄目ですか」

清兵衛の茶好きは、この町でも評判である。その茶席での菓子を喜六にというのである。清兵衛は隣り近所との付き合いも人一倍大切に、世話役でもある。この新町の八重萬より南、岳駒町への入口の角、萩江堂という老舗の菓子屋に頼み、ずっとこの菓子を利用している。

「でも、萩江堂さんじゃなくてよろしいのですか」

「その萩江堂だが、職人が入れ替わったりし、近頃拵えて持つてくるものに精彩がないんですよ」

「でも手前には」

「なあに、萩江堂への気遣いは要りません。先ほど話したように、商いはずっと同じことだけに安住してはなりません。決して目新しいものは必要ないのですが、心を打つ、訴えかけるものが欲しいのです」

清兵衛の頼みは、熱をおびてきて、喜六はこの話を聞かされたからには、もう逃げ道はないと感じた。覚悟を決めて、

「本当に手前でよいのですね」

「そうですか。引き受けてくださいますね。喜六さんのやりたいような、拵えたいような菓子を出してくればいい。初釜には、この町の風変わりを呼ぶつもりです。いやいや、わしも道楽者の風変わり者ですが」

喜六が承知したことで清兵衛は喜び、店先まで喜六を見送りに出た。喜六は正直、清兵衛

の期待に応えられるか、まったく今のところ見当がつかない。また、降ろしたばかりの重い荷物を背負ったような気がした。

五、隠し事

日はすでに暮れている。八重萬の蔵の脇、広瀬川のほとりを辿り、喜六は新富町と高砂町を結ぶ裏通りに出ようとした。八重萬の裏手には小さな祠があり、その側の橋を渡ろうとしたのである。その時、人影が喜六に残像として映り込み、一つ背を押すような風が広瀬川を吹き去っていく。そのまま橋を渡っていたが、なぜか気になり、大きな銀杏の根元の祠（ほこら）に取つて返し、その影を確かめてみた。菅笠（すげがさ）の女らしき姿である。わずかばかりためらい、喜六は恐る恐る声を掛けてみる。

「どうかしたのかい」

側に近寄り覗いてみるとそれは若い女である。しきりに右足をさすっている。

「怪我でもしたのかい」

「え、少し挫(くじ)いてしまったようで、少し休んでいます」

女はどうやら盲目(めくら)らしい。喜六は女の脚絆(きゃはん)の上から足に触れてみる。女は顔をゆがめたようだった。正直どうしたものかと迷った。

実はこの祠には因縁がある。かつて八重萬の下働きの者がここで広瀬川に引きずり込まれそうになるなど、曰く付きの場所である。そうしたこともあり、それらを祓うためこの祠を清兵衛の先代が建てたのであった。

そんな事もあり、女狐ではないかと疑いもした。しかし喜六は、

「よし、手前(てまえ)の背中に負ぶされ。家に行つて手当てしよう」

その言葉に女は二度、三度首を振つたが、喜六はもう女の三味線袋を手に抱え、ためらう女を背負い橋を渡つていた。女の冷たくなつた体を背に感じながら家路を急ぐ。

「お前さんは、この町に来て日は浅いのか」

聞くと、女は雪乃と言つた。黒沢尻の町に三人で門付けに来たとも言う。泊り宿にひと月ほど泊り、周辺の部落を歩き、もうすぐ一つ山脈を越して横手に戻る時期だと返答した。

喜六は今、やつと思ひ起こした。ひよつとするとあの初雪の朝、店の前に立つた門付けがこの雪乃だったかも知れないと。そんなことを思い巡らせ、縦格子越しの障子から灯りが漏れ始める新富町に抜ける。二人の姿は影絵のように障子に際立つ。一方で、このまま雪乃を

背負つて戻り、世津は何と言うだろうか。そんなことが喜六に気掛かりでもある。

君代座のあたり、芝居が終わつた後の数人の男衆から声が浴びせられる。

「いよつ、何処ぞへ道行きで」

「色男は辛いなあ」

雪乃は、

「申し分けねえ。申し分けねえ」

と背中から詫びを繰り返すばかりである。

料亭で賑わう新富町を抜けると、通りは突如暗闇に舞い込んだようになる。犬に吠えられ足元に気を配りながら、花屋町への近道の路地を抜ける。

ほのかな灯りが漏れる。喜六の小さな店の格子戸から漏れる灯りである。

「ここが手前の家だ」

雪乃を背負つたまま、その表戸をくぐつた。

「今、帰つたよ」

奥から待ちわびていたように、暖簾を分けて世津が店に出てきた。当然ながら二人を見て困惑した顔つきを見せる。案の定、割烹着に後ろ手をし、怪訝(げげん)そうに上目遣いに聞く。

「誰だい、そのお方は」

「八重萬さんの裏で足を痛めていた。可愛そうだと思い連れて来た」

「なあーに、それだつたら医者様の方が良かったじゃないの」

亭主がわざわざ家まで連れて来たのには、何か隠し事があるのではと、世津は疑いを隠せないでいる。これ以上詮索されまいと、喜六は素知らぬ振りをして、

「雪乃さんというんだ。門付けて回っているのだそうだ」

少し不機嫌な世津に有無も言わせまいと、早く足を冷やさねばなるまい。大根を出来るだけ一杯おろせと命じて、板間に雪乃を降ろした。菅笠の上に三味線袋と竹杖を抱き、

「おかみさん、すみません。雪乃といいます。厄介掛けて本当に申し分けねえ」

「早くしろよ。早く」

流し場に立つ世津の背後から二人の言葉が入り混じる。

どんぶり鉢一杯に播りおろされた大根を、雪乃の右足の付け根の処、手拭いに載せ結ぶ。

雪乃の表情が痛みで少し強ばる。喜六はこれで少しは痛みが和らぐだろうと思った。この手当は、子供の頃母親がしてくれた手当の仕方であった。

「ところで、雪乃さん。泊り宿はどこだい。狭いが今日はうちで休んでいくがいい。連れの人たちが心配するといけないから、手前が宿にちよいと知らせに行つて来るから」

「いや、帰れますから」

「遠慮は要らない。世津もそうしろと」

勝手に喜六は事を決めた。世津にしてみれば、盲目といえども若い女だ。どうしたものか迷っていたが、そんな女房の案じ事などに構わず、喜六は雪乃を置いてさつさと駅前の後藤屋へ飛び出してしまった。

二人残され気まずくなる中、世津も嫌とも言えず仕方なく雪乃に、

「何もお構いできないけど、ひと晩ゆつくり休んでおくれ」

と困り切った様子がいまだ隠せない。

高い天井の梁から吊された洋燈(らんぷ)一つが灯る下、雪乃を交えた四人の夕餉となった。

喜六の家族以外の者が、こうして一緒に食卓を囲むことは珍しい。とりわけ娘の由梨は、しきりに雪乃を脇目使いに見る。雪乃は盲目とは思えないほど、上手にご飯、芋の子汁、おかずの塩引きをこぼさず食べる。世津はその振舞に感心して、

「雪乃さんは何でも一人前にできるんだな。由梨、お前も姉さんを見習わねば」

困惑していた世津も少しは雪乃に好感を持ちつつあるようである。

「遠慮せず食べておくれ。急なことなのでこんなものしか支度出来やしなないけれど、自分の家だと思つて」

喜六は世津と雪乃との間が和みかけていることに少し安堵した。そして、雪乃の事にすつ

かり感じていたが、夕方、清兵衛と約束してきたこと、初釜の菓子のこと、もう気掛りになつていた。隣りの世津は雪乃のことかと勘ぐり、喜六に正す。

「お前さん、まだ何か心配事、隠し事でもあるんですか」

喜六は、まだ清兵衛との話を世津にしていなかったことに気付き、初釜の菓子を受けてきたことを伝えた。

「大丈夫ですか。なかなか気が難しい方だとも聞いていますよ」

「いやいや、八重萬さんは人のいい人だ」

「その人のいい事と、お代を頂き仕事をする事で、どれだけお前さんは、今まで裏切られて来たと思います」

世津の言うことは本当の事である。仕事を頼むが、いざその代金を払う段ともなれば、大方払うのを渋る。払つてやるという態度が伺えるものだ。なかなか銭離れのいい人は世間には少ない。また、あまり最初から銭のいい話をする人もくせ者だ。逆に、渋ちんそうな人が、きつちり律儀にも払ってくれる場合もある。そして素直に喜んでくれる。そんな経験を商いを始めて、喜六は嫌と言うほど味わつて来ているのだ。

「八重萬さんに限つて、そんなことはないだろう」

「そうだといいですがね」

「俺がやると決めたことだ。口出しするな」

世津の横やりに、喜六は言葉を荒げてしまう。この話のやりとりを雪乃は、どうしたらいいものかと、気まずそうに二人の間で聞いている。由梨はもうご飯を終えて、世津が拵(こしら)えてあげた人形で一人遊びをしている。

そんな気まずさを払いのけるかのように、喜六は雪乃に明日手前の拵えた生菓子をご馳走しようと言いつ出す。

「いや、そんな菓子なんて。私にはもつたいたないです」

今まで雪乃は、生菓子などというものを口にしたことはない。煎餅や団子、饅頭、この土地の駄菓子、豆銀糖といったものは当然ながらあつたが、生菓子という言葉聞いてどんなものなのか、どんな味がするのか皆目見当もつかないのである。

食卓の茶ぶたいをたたみ、その茶の間に寢床の支度を世津が手際よくする。雪乃は、世津が用意してくれた温かい手拭いで手足を拭き、右足の大根おろしを取り替えた。これも世津の寝間着を借りて床に入った。世津と由梨、そして雪乃。喜六は店の小上がりに床を敷いた。雪乃は明日の菓子がどんなものか思い、喜六は初釜の菓子をどうしようかと思ひ床に着いた。正月まであと十日あまりしかない。

六、目隠し

翌朝、まだ暗い内に店と奥との間の作業場に喜六は居た。初釜の菓子のことをあれこれ考へ出すと、なかなか昨夜は寝付かれなかった。おぼろげながら題材は、初春らしく梅でいこうと思つている。いわゆる練切菓子で拵（こしら）え、喜六得意の形の良さと色づかいの妙であつと言わせたとも考へている。そんなものの一つを雪乃に食わせたと思つた。

形を変えて四、五個ほど拵え、黒塗りの漆器の器に入れる。漆黒を背に手前（てめえ）でもほれぼれする梅の出来映えであつた。喜六は待ちきれず、朝飯前の茶ぶたいの上にその器を置いた。なかなかいい出来映えと世津も脇から覗き見る。まだ朝ご飯前だからと止める世津の話も聞かず、身支度をしている雪乃に、

「これが手前が拵えた寒梅という名の菓子だ。手に取つて食べてごらん」

雪乃は手の平に載せられた菓子を、か細い指で撫でるように、

「これが旦那さんの拵えた菓子ですか」

指先で形を確かめ、口元に運び、少しの間その香りを嗅いでみる。それからおもむろに淡色紅の菓子を、小さな雪乃の唇でくわえ口に含んだ。

「うわー、うめえ。なんと言えばいいのか」

「うめいか。そうだろう」

喜六も世津も雪乃の口元、その顔がみるみるうちにほころぶ様子に見とれた。白い肌が紅潮する初々しさが伝わる。喜六はこれならば初釜は大丈夫に違いないと思ひもした。菓子を口にして茶を一口すすった後、雪乃は意外なことを言い出す。

「私には味がよく分かります。形も触れば多少なりとも分かります。ただ、この菓子の色がどんな風に綺麗なのか、分からないのが口惜しいです」

喜六はぐらついた。目明きが日頃何気なしに見ている色、形とは、雪乃のような盲目（めくら）には、いったい何の意味があるのだろうか。雪乃のこの言葉に、今までその形や色にはばかりこだわり続けてきた手前の菓子づくりに対して、一撃を食らってしまった思いだ。直ぐには次の言葉が見つからず、手前を落ち着かせようと一口お茶を飲む。気を取り直し、

「そうかい。雪乃さんには、色が分らないのだ。いいことを教えてくれた」

雪乃は自分の言ったことを責めてか、何度も申し訳ないと頭を下げる。

「そんなことはない。目明きに見えていたつもりで見えないもの、感じ得ないものを雪乃さんは感じとっている」

「見えることは、逆にものの真を見えなくしているのではなからうか。雪乃さん本当に有難う」

喜六は世津の眼をはばからず、雪乃の手を握りしめた。思つたより芯が強そうだが、ひどく手荒れがして、若い雪乃の旅の辛さを思わせもした。

足の痛みも和らぎ出したという雪乃を引き連れ、駅前の後藤屋へ向かう。幸町の踏切番をしているイブリヤと呼ばれている一杯飲み屋の角を、和野の下道づたいの小径に折れた。正月を前にして、セリ摘みに余念がない頬被りの百姓たちの姿がある。

雪乃は少し空に顔を突き出し、

「セリの匂いにする。水の匂いも。私の里と同じ匂いもする」

「そうだよ。ここは古くから湧き水が豊富だ。いいセリが採れる」

小径の中段、喜六が帰帆場(きはんじよ)の湧き水に手を浸すと、思つたより温い。雪乃に水に触れてごらんと振り向こうとした時、背後から突然目隠しされた。冷たい手だ。解き放そうとすると、ほのかな鬢(びん)の甘い香りがした。そのまま二人の刻が止まってしまい、さうな気配に、雪乃はふざけるように、

「私の気持ちになつて、この水の匂い聞いてみて。いろんなふうに分かるでしょ」

喜六の背にぴったり寄り添つた雪乃の手がしだいに温くなつていく。また、雪乃が耳元で呪文でもかけるようにささやく。

「絶対、目を開かないでくださいね」

「私は一度きりも見たことがないんですから。この水も、そして旦那さんが綺麗だと思いで目にするものすべてを」

湧き水が水底から盛上がり、セリ田に流れ出る音が足元に響き届く。遠く陸蒸気の煙の匂いと汽笛もする。百姓たちがセリの泥を洗い流すザッザッという音も混じる。

喜六は出来ることなら、こうして雪乃の手を手前の脛ですつと温め続けてやりたいとさえ思った。しかし、それは男の勝手だけでもあると。そんな喜六の優しさを感じてか、

「もう勘弁してあげる。大恩ある方だも」

「勘弁なんて。何もしてやれなくて」

喜六は謝り、口について出そうになつた想いを呑み込んだ。

雪乃は正月には宿を引き払い、横手に戻るとのことだ。山越えの雪道のことや次の旅のことなど、喜六は雪乃と話し、手を引きコンニャク橋を渡り駅前前に辿り着いた。後藤屋の玄関先で、達者でなどの喜六の言葉に、

「はい、本当に有り難うございました。菓子のあの味、旦那さんのこと忘れません」

返答する雪乃の背後から、姉弟子らしい声がしてくる。その声を聞きながら、手前の用は済んだと、想いを断ち切るように後藤屋を足早に立ち去った。馬車鉄出発の合図の鉦が駅前に響く。馬のいななきも混じった。

七、鏡餅

雪乃がこの町を離れてしまつてからも、喜六は初釜の菓子をどう拵(こしら)えようか思案を続けていた。あの時雪乃から気付かされた、ものの真、色や形にこだわらないということ、どう手前(てめえ)の菓자에表そう、想いを込めようか悩んでいた。

年越を三日程前にした日、世津が丸重に暮れの挨拶にと手製の布巾と雑巾を持たせた。喜六と世津を結びつけたのは丸重のおかみさんだった。喜六もしばらく顔を出していないのでこの際にと思った。

丸重は本町の西裏人市場にある。年越の支度や用足しの人出で賑わう本町を突つ切つて裏道に入った。今年は初雪が降つたきり、その後積もるほどの雪はない。茅葺き屋根からもツララは下りていない。雪乃の帰り道も少しは楽かろうと、喜六の頭をよぎつた。

丸重では年越を迎えて、一年で一番忙しい時な筈だ。店が近づくにつれて、捻りはじ巻き姿の親方が威勢よく立ち振る舞う姿がもう浮かぶ。「団子丸重」と無骨な字で記された看板が

掛かるその店の戸を開けた。しかし、あのいつもの熱気が、湯気がないので喜六は拍子抜けしてしまつた。店には力ない親方の後ろ姿が一つがあるだけである。

「親方、ご無沙汰しています」

不意の来客に親方は、驚いて振り向いた。すぐ名が出ないらしい。喜六を懸命に指差し、指差し、口ごもりながら、

「おお、喜、喜、喜六、喜六か」

「親方、ご無沙汰しています」

二人とも手を取り合つた。やがて、奥から蒸籠（せいろう）を抱えておかみさんが出て来た。

「あら、喜六じゃないの」

久しぶりに会つたのに、いつものように喜六を優しく迎えてくれた。世津が持たせてくれた歳暮だと差し出し、

「世津の奴が宜しく言っていました」

「そうかい、そうかい」

「親方も元気で何よりです」

一瞬、おかみさんの表情が曇つた。

「それがそうでもないのよ」

おかみさんは、亭主の右手が思うようにならないことを喜六にこぼし始めた。そして、何

とかこの暮れの鏡餅の注文だけは拵えようと。その先からのことは、後継ぎもないので、もう店を閉じないといけないとも告げた。

「そうですかい。もう無理ですか」

「あゝ、この手が。長年痛めつけたらしく、言うことをきかなくなった」

「何も悪いことをした筈でもない。朝から晩まで身を粉にして働きづめたのに。何ということだ」

親方は餅をひねりながら溜息をついた。餅を形よく丸めようとするが、どうしても片手では難しいらしい。やはり両手で形を作らないとうまくないらしい。

「喜六、こんな歪なものしか出来なくなった。俺は悔しいよ」

作業台の片栗粉の上で拵えられた鏡餅は、決して昔のような福与かな形をしていない。右、左とわずかながらどちらかに傾いている。それを目の当たりにして親方同様、喜六も目頭が熱くなった。親方が思うように鏡餅を拵えられない姿と母親の姿がだぶった。

かつて喜六が店を始めた頃、母親が商売繁盛にと鏡餅を拵えてくれたことに。母親の拵える鏡餅は、親方が今拵えているものより、ずっと形が歪(いびつ)だった。餅肌も決していいとは言えないものだった。ただ、それは形を超えて、母の、親の情がこもった鏡餅であった。

しかし、今の親方に喜六はそのことを、形なんかどうでもいいのではと決して言えない。

親方は上手に拵えてこそ、値打ちがあり、それが丸重の商いでもあるのだ。

「喜六もいつか味わうことかも知れん。しつかり今の俺の姿を見ていくんだぞ」

親方は目を反らそうとする喜六に、手前の最後の仕事を見ていろと言わんばかりに、鏡餅づくりをした。平台の上に、親方の鏡餅が、意気のこもった不揃いの鏡餅が並んだ。

またしても喜六はぐらついてしまった。形、色ではないと思わせた雪乃の言葉。鏡餅を形良く拵えられなくなった丸重の親方。

初釜の菓子の形が定まらない。菓子姿が喜六の頭から逆に遠ざかって年越を迎えてしまった。またもや喜六には黙って、世津は着物を質に入れ、年越しを迎えようとしている。喜六は手前の不甲斐なさを責めながら、店の平机の前に座り、紙をいつものように拡げて置いている。紙の上に縦格子の影が斜めに落ちる。その影がわずかながら傾きを増していく。

絵筆を持ったが、形はいつこうに湧いてこない。確かに、喜六は形を消そうと考えているのだから無理もない。頭を擡(もた)げ、そのまま臉をじつと閉じてみた。きつと雪乃が見ている闇もこのようなものかと思ひ、しばらくそうした。そこはまったくの闇ではなく、臉に映る陽の色が燃えている。雪乃にはこの臉の内に宿る色さえおそらく感ずることができない。雪乃の「私の気持ちになつて」という言葉が浮かぶ。

凜とした年越の空気の中、気ぜわしい様子、町のざわめきが届いてくる。年を越す気持ちの高まりが感じられる。勝手場から世津が雑煮の具を刻む音が心地よくする。大根、牛蒡、

人參、セリの色が音とともに喜六の処まで届く。由梨はもう正月を待ちきれず、羽子板で羽根を突いている。いろんなものが、瞼を閉じた喜六の心に響いて来る。それは決して形や色でなく、もの、人を慕う手前の気持ちが心の眼を開かせてくれるのかも知れない。

そう喜六が思つて再び、

「手前の心の眼」

とつぶやいた。何事にも囚われず手前だけの心持ちを頼りに出来やしないかと。

「そうか、瞼を開かずに菓子を拵える」

「それを瞼を開かず、味わう」

と喜六は突飛もない考えに辿り着いた。

となると、頭の中にその趣向が堰を切つたように溢れ出してきた。

清兵衛の初釜の前日、少しだけ西空が朱く染まつたかと思うと、夕刻から寒の入りに合わせたように、綿のような雪が舞つてきた。あつという間に本降りとなり、町は群青の闇の中、綿雪に覆い隠されようとしている。

喜六は明日拵える生菓子の名を、平机の半紙にしたためた。

「梅七ツ」

梅に初釜で用意する生菓子の数を合わせただけの名だ。一度切りの生菓子の意味合いを込

めたものだ。仕事場の神棚の前にそれを貼り、御神酒（おみき）を上げ手を合わせた。材料の仕込みは、この数日念入りに済ませた。後は明朝を待つだけである。落ち着き払った中にも、喜六には胸の高鳴りが感じられた。

八、初釜

町が大雪に見舞われた初釜の朝が来た。昨夜とは異なり朝から天気が良い。町は薄青い雪布団に包まれ、まだ眠りから覚めない。喜六の吐く息が凍りつき、びりつと肌を突き刺す寒さだ。そんな中、店先の雪払いを先に済ませた。

陽が昇る前、喜六は裏の井戸、桶で寒水を頭から二度、三度と浴びる。陽差しだけは幾分温くなってくるが寒の最中だ。喜六の体から立つ湯気が辺りに流れていく。手拭いで体を拭き、褌を締め直し身支度を調べ、白い前掛けをきりつと締めた。

仕事場の作業台には、下拵（こしら）えした練切りが入った箱が用意されている。その前に

正座し諸々の位置を確かめ、喜六は手拭いで目隠しをぎりりとした。後は手前(てめえ)の手の先を頼りに、それを信じるだけだ。全神経を指先に注ぎ込む。いつもしていることとは言え、見えないことはとてつもない不安の闇となった。

こうして目隠しをしたまま、菓子を一つつ拵えた。拵えたという思いより、手で、指先で喜六の想いを吹き込んだといつてよい。脇に用意してあつた重箱に、一つつその位置を確かめるように七つ置き、そつと蓋を閉じた。そこでやつと喜六は手拭いはずした。

喜六の目の前、作業台に黒塗りの重箱が蓋をされてある。もう、茶会が始まるまで聞くことはない。ふつと息をつき、布巾で手を拭きながら、

「おい、風呂敷を持つて来い」

奥から待ちかねたように、世津が折りたたんだ刺し子の風呂敷を持つてきた。

「思うように出来ましたか」

「分かん。ただ精一杯拵えただけだ」

重箱を風呂敷にしつかり包み終えた。しかし、これから次の作法が待ち構えている。表向きは淡々としているが、内心茶会の客人たちが、清兵衛がどんな反応を示すか、期待と不安が入り混じつた。

昼間時を幾分過ぎた頃、喜六は風呂敷包みを小脇にしつかり抱え八重萬の店の奥に居た。

何とはなしに、店も華やいだ雰囲気である。庭の植木も、灯籠も昨夜のどか雪をまだ鏡餅のように載せている。陽差しが届く処では、時折その雪が簾のように落ち、緑の枝が跳ね上がった。

奥からの戸が開き、清兵衛が顔を見せた。その姿に喜六は思わず背筋を伸ばす。

「やあやあ、待たせましたね。何かと支度がありましてね。それでいかがですか。菓子の方は」

いつもの物腰の低さで語りかける。

「はい、ここに持参しました」

喜六は風呂敷包みを指すと、清兵衛は待ち切れずに、どれどれというふうにならぶ包みに歩み寄ってきた。急かせるように、

「さき、開けて見せてくれませんか。どんなものを拵えてきたのか」

「いや、今はお見せできません。茶席でお願いします」

喜六の言葉に清兵衛は、なぜだと言わんばかりの顔をさせた。が、さすが清兵衛も一度は喜六に任せたのだからと、その表情を一転させ和らげた。

「何か趣向でもありますね。先日の梅の枝の申し入れがあつた時から、何かそう思っていました」

「さすが八重萬さん。失礼とは思いましたが、手前の指図で茶会を進めさせて頂きます。茶

席の方々に、手前が用意しました手拭いをお渡しします」

差し出した手拭いは白無地に、隅に「喜六」と染め込んでいる店の使い物のものだ。

「それで、この手拭いどうするのですか」

「それからは茶席でお願いします」

清兵衛も後は訊ねようとしなかった。

「それじゃ、ご案内しましょうか」

清兵衛は喜六を従え、母屋の廊下を何度も曲がり、母屋と土蔵に挟まれた茶会を行う座敷の隣り、控えの間に案内した。二、三人客人がもう見えているらしく笑い声も漏れる。

控えの間に入るなり清兵衛は、

「今日の茶は、何やら面白くなりそうですぞ」

客人たちに対し、喜六の趣向に悪乗りするように無邪気な振る舞いをしてみせた。客人たちを前にして、喜六を紹介した。

「本日の菓子を拵えてくれた喜六さんです。若いのになかなかの腕を持っていなさります。

無理を言ってお願いました」

八重萬の初釜の客人は、すべてがこの町の名土と言つてもいい。本日の主客だと言う土地持ちの県議員源右衛門、いずれば町長をねらつているとの噂である。そして青柳町の石屋栄之助、お花の師匠だと言う女、絵描きの充三郎。そしてもう一人、これは場違いそうにな

男がいた。どうみても腰巾着としか見えない正一と言う遊び人である。

最後にやってきた絵描き充三郎を待つて、茶会が始まった。亭主清兵衛の案内で座敷にそれぞれが入った。喜六も末席に着いた。釜がすでに沸き、鳴っている。床の間には、前もつて喜六が清兵衛に頼んでおいた梅の花が、枝ごと数本花瓶に投げ込まれるように生けられている。この真冬にどこで手に入れてきたのか、そこが清兵衛の財力でもあり、趣味人としての本領発揮である。

亭主の座に着いた清兵衛が、

「喜六さん、それでは菓子を配つて頂きましょうか」

その指示に、喜六が少し前ににじり出て、

「その前に、皆様方にこの手拭いで目隠しをして頂きます。もちろん亭主の八重萬さん、手前もです」

それを聞いて、みんなあつげにとられている。手拭いが順繰りに手送りされる。客人たちははいつたい何が起こるのだろうか興味津々のようだ。客人たち同様、喜六の目も塞がれ皆が闇に入り込む。

座敷は静けさを一層増すかのようだ。

「皆様方、ご用意出来ましたね」

「本日の茶席にご用意しました菓子の名は、実は名付けておりません。皆様方が味わって名付けて頂きます」

そう講釈し喜六は、おもむろに手探りで重箱を開けた。膝を畳に擦付けながら、正客の県会議員の前に差し出し置いた。重箱を手送りしながら清兵衛も目隠しの中で、それぞれが菓子を探りあて、手元に置く。一人だけ転がす粗相(そそう)をする者がいた。確かではないが、おそらく正一であろう。

「皆様方、すべてお取りになりましたね」

「まず、そのまま形と色をご覧になって下さい」

と喜六が言うと、すかさず、

「そんな、何も、何も見えないじゃないか」

とまず県会議員が怒った。次いで絵描きも言葉を重ねた。

「闇鍋は聞いたことがあるが、闇茶とはな。これを称して無茶苦茶というのだな」

客人たちは驚いているのではなく、怒っているかのようだ。末席の正一という男が、

「へえー、これがお茶会というお大尽遊びですか。随分酔狂なものですねえ。暗闇にものを見ろとな」

と茶々を入れる。清兵衛さえこの場の気まずさをすでに感じとっているらしい。少し困り果てているようでもある。

しかし、花の師匠が周りをなだめるように、分別を少し誇示するかのよう、

「いやいや、梅の匂いがしてきます」

「そうじゃ、梅の香がする」

石屋も言い添えた。これで県会議員も怒りを呑み込まざるをえなくなった。清兵衛は何やら喜六の次の指図を待っているようだ。

喜六は少しだけ間を置き、皆の心持が落ち着くのを待った。喜六自身が手探りしてみせ、「手元の菓子を手で確かめながら、どうぞご自由に召し上がってください」

県会議員がお預けを喰らった犬のように、待ち切れず言う。

「やつとこのことで、口に入れられるのじゃな。ずいぶん、厄介なことじゃ」

茶席の一同、お互いの仕草も見えず、周りの衣擦れや口に含む音を聞きながら、それぞれの菓子を口に含んでいるようである。闇の中に一瞬沈黙があった。すると、

「うわ、これはうまい。何という名の菓子だ」

また、県会議員は先走りして言う。喜六は至極平然を装い、

「先ほども申しましたように、名は皆様方がそれぞれお付けになって下さい」

「そうそう、そうじゃったな」

と自分を納得させながら、県会議員は口に含み続ける。隣の正一が先に食べ終わったらしく、

「なぜか、俺には鶯の声が聞こえますぜ」

喜六にとつても予期しない反応だった。正一の言葉に、茶席の場が一気に和み始め、正一に負けまいと次々に菓子味のわいが語られた。

「野辺に咲く花々のようじゃな。風が吹き去る音もする。一幅の絵のようじゃ」

「わたしは一輪の梅かな。鶯と言えば梅ですものね」

「わしや、亡くした息子の面影が浮かぶ」

そんな客人たちの声を聞きながら、清兵衛が最後に口を開いた。

「わたしには、西山の斑(まだら)模様の山腹に桜が一面咲き誇るのが見えました。喜六さん、味のある菓子を拵えてくれましたね」

その喜びを率直に伝える。続けて、

「すべて菓子は、客人方のお腹に収まつてしまいましたので、この辺で目隠しを取つても誰一人、あの菓子の形、色を二度と見ることができません」

清兵衛の言う通りだ。拵えた喜六本人でさえ、下拵えの段階は当然眼にしたが、今朝方喜六の手の中で形を得てから、誰もその形、色を見ることが出来なかったのである。

喜六は自分で拵えた菓子を口にし、周りの客人のように想いを巡らせてみた。それは、雪の中を旅するあの雪乃の一人旅の姿だった。雪乃は正月には無事辿り着けたのだろうか。それが気掛りではなかった。手前の拵えた菓子は、この宿場町を吹抜けていった雪乃の風な

のかも知れないとも思つた。

清兵衛が、

「これくらいにして、もう目隠しは取つてもよさそうですね」

その合図に座敷中、障子からこぼれる明るさを受け、包まれた。客人たちの顔は、どの顔にもこやかで穏やかである。

清兵衛が丁寧に入れる濃茶を、あの菓子のを今一度舌に蘇らせ、転がし、それぞれの形色を楽しみ、愛で、記憶に留めるように味わっているようである。こうして初釜は無事終えようとしている。正一が座敷から退く際に、

「ホー、ホケキヨ」

と鶯の鳴き声の真似をして見せた。一足先にこの座敷に春の訪れが告げられた。客人たちも、同じように鳴き声を真似ながら、母屋の方に退いていく。

九、洪賃

初釜を終えて、客人たちの見送りを済ませると、清兵衛が喜六を再び茶に誘った。夕間暮れの早い午後の陽が、もう障子を朱の色に変えつつある。

清兵衛は茶を入れながら満足した様子で、

「本日は本当にご苦勞様でしたね。アクの強い客人たちも、あのように童心にかえり喜んでくれました。わしも年甲斐もなく、ドキドキして楽しませて頂いた」

茶を喜六に差し出し、

「正直、一時はどうなることかと心配もしましたが。どうしてどうして、ここまで客人方々に受けるとは」

おそらく県会議員の源右衛門のことを言っているのだ。清兵衛とて何かと町場の付き合いも粗相(そそ)う)できない微妙な立場にある筈である。喜六も白状するかのように、

「いや何の、火事場の馬鹿力みたいなもので」

喜六も一か八かのこと、自分でも確固たる自信があつてやったことではない。そのことを、とつくに清兵衛も見抜いていたらしく、

「喜六さんも若いね。その正直さがいい」

だが、清兵衛も年の功である。

「分かっていると思いますが、やはり今日の趣向にはどこか無理があります。すべてが今日

の客人のような料を愛でたり、楽しんでくれる者がすべてではありませんよ」

と、喜六に言い含めるように続けた。

「だが、そのぶぎつちよで、一途なところがいい。それがお前さんの若さです。わしも道楽者で人一倍若いつもりですが、その分別ない度胸には、到底太刀打ち出来ない。どうしても定まったこと、年相応の考えを押しつけてしまいます」

喜六を持ち上げておいて、最後はしっかりと釘を刺す。

「本日のことを肝に銘じ、本当の形、色、心のこもった仕事をして下され。喜六さん、お前さんはこれからが勝負です。脇道に逃げてその場しのぎの菓子は、決して拵（こしら）えてはなりませんぞ」

清兵衛の言葉は、喜六の心底まで響いた。冷や汗をかきながら、穴があつたら入りたいと思わせました。先ほどの浮ついた手前に嫌気がさしました。こうなると清兵衛は喜六の何倍も上手である。

「ところで、本日の菓子のお代はいくらですか。遠慮せず仰つて下さい」

喜六はいくらお代を請求すればいいのか考えてもいない。初釜の菓子を無事納めることだけで、正直そこまで気が回らなかつた。損しない程度の適当な金額を返答した。

「そりゃ、安すぎます。それじゃ商売になりませんでしょう。いくら何でも」

清兵衛の反応に驚いた。もう少し高い金額を返答すれば良かったと思ひました。だが、喜

六があれこれ頭の中で考える間もなく、直ぐさま清兵衛が、

「少し勉強してくれないかな。ほんの、気持ちでいいのです。いわば、本日の稽古料がさし引かれると思つて下さい」

「本来なら、喜六さんの方で茶会での広告料を包まねばならぬのが世間一般でしょうが、わたしと喜六さんの仲ですしね」

清兵衛は、あの「喜六」の手拭いから広告料、いや、この初釜への菓子の出展料というべきものを取ろうとしているようだ。確かに、町中に喜六の菓子の評判が伝わるとすれば、その広告料だと言えば安いものに違いない。そこまで清兵衛が見越して喜六に声を掛けているとは思ひもしないが、やはり三代目とは言え根っからの商人である。

清兵衛は懐から錢を懐紙に包み、喜六の前に差し出した。錢は差し出してしまつた方が断然強い。現ナマはどんな条件の口約束より確かで強みを持つ。喜六は清兵衛のこの交渉の巧みさに心中啞然とした。しかし、ここで同じ商人として弱みを見せてはこれからの取引に差し支える。頑張り処である。

そこは少しも顔色を変えず、目一杯の満面の笑みをたたえて、

「毎度ありがとうございます。これからもご最良（ひいき）をお願い致します」

と、清兵衛に深々と頭を下げて見せた。

帰ればまた、

「だから言ったでしょ。人の良さそうな商売人は財布の紐が堅く、渋賃（しぶちん）だって。だからこそあのように蔵が幾つも建つのよ。お前さんも少しは見習いなさいよ」

世津にきつい小言を言われるに違いない。だが、女房の小言あつてこそ、何とかこうして商売を続けても行ける「喜六の菓子」づくりでもあるのだ。

初荷

一、 思惑

「おいおい、道の真ん中じゃ、危ねえぜ」

諏訪の通りのど真ん中を歩く二人連れがどやされる。黒塗りの自転車の魚屋が、二人の間を割り、

「こっちはイキが一番の商売だ。お前らのように、そう熱くては腐ってしまうぜ」

前掛けをした巨漢の男が息を吐き、魚箱を重ね、右に左に体を揺らし突っ切って行く。

清治は諏訪町に店を構える魚屋だ。ここ諏訪神社の門前町に、清治の代になってから店を構えて七回程になる。もともと清治の家は、新町の東裏通り高砂町で、昆布や干物など乾物を取り扱う小さな商いをしていた。父親は南部の下級武士の家に育った。その父親の代からそれらを竹籠で背負って、黒沢尻はもとより和賀郡下の雪深い近郷に行商して歩き暮らしたててきた。決して大きな利幅の出る商いではなかった。

若い清治が家業を手伝うようになり、商う品が魚類に変わった。清治がガキ大将であった幼馴染みのツテで、魚を扱う市場に出入りすることが出来るようになったからだ。天秤棒では遠くまで行けないと、出始めた新品の黒塗りの自転車を大枚を払って買い、荷台に木箱を

重ね結わえ、その巨体を揺すりながら懸命にこぐ。その姿は、すぐあちこちの人気者となった。清治の行く所々で、

「えさばや来た。何持ってきた？」

清治の生来の人なつっこさに惹(ひ)かれ、町場に留まらず在でもその商いはずいぶん重宝されもした。そのため、日に二度は荷箱を入れ替え、出来るだけ日数をあまり置かず、定期的に顔を出すようにした。

そんな努力の甲斐もあつてか、幼馴染みのヨシエも娶(めと)ることが出来、いよいよ働き者の夫婦は、毎日休む暇も惜しみ商いに明け暮れた。そして、諏訪町に空き店が出たのをきっかけに店を構えた。清治の念願叶った店だ。店を持つにあたり、新たな屋号を「川清」とした。川は名字の川村からとつた。魚を扱う商いにふさわしい名だと、これも評判となり、宿場一、二と言われるほどの魚屋になるのに、そう時を要しなかつた。もう、その頃には父母は引退し、悠々自適となり、店の裏手に離れを拵えて、庭いじりなどに精を出す隠居生活となつた。

女房ヨシエの実家は、川岸の船頭を代々してきた家系である。東北線の鉄道開通により陸に上がり、今では弟が鉄道に勤めている。かつての御蔵近くにそれなりの家屋敷もあり、ヨシエも不自由なく育ててもらつた。きかん坊の清治としつかり者のヨシエが一緒になることで、周りは驚き、どうなるものかと心配する節もあつたが、どうしてどうして二人は似合い

の夫婦と評判となった。

川清が店を構える諏訪町は、黒沢尻の守護神である諏訪神社の西の方角、本町と新町の結節部、丁場に至る通り、いわば参道の通りである。もともと諏訪神社は、直ぐ北東にあたる幸町の和野の清水近くにあつたものを、江戸の中頃にこの地に遷座したものだ。今では杉林に囲まれ、鬱蒼とした諏訪の杜は、宿場町の中、遠目には浮島のような姿にも見える。

川清の商いの繁盛ぶりからして当然の如く、門前の店々の旦那衆から、清治を諏訪町の世話役に推す声を持ち上がった。そして、ゆくゆくは県会議員に担ぎ出そうとするなど、それぞれの大小なりの思惑も出始めている。黒沢尻の県会議員は、このところ代々に渡り斎源の源右衛門のところが公然の如く、いわゆる世襲となつて受け継いでいる。町衆では誰一人、口を出せる者はおらず、かえつて大方の町衆や旦那衆は源右衛門を傘にして、その恩恵に与ろうとしていた。他人の種(ふんどし)で相撲を取る、そうした日和見(ひよりみ)な気質の商人が多いのである。

斎源は本町に屋敷を構え、商い事というより、その財力と先を見る眼を活かし、和賀郡下のありとあらゆる新しい事業に手をつけ、力を注ぎ、それが財力を一層大きくしている。また一方で、巷の商人への金貸しを行い、借金の形に土地を取り、ある時は土地の買収を重ねながら、雪だるま式に土地を増やし、この宿場町の大地主となった。

そんな源右衛門と清治を、ゆくゆくは県議で争わせようとする町衆の企みも見え隠れしている。町衆は源右衛門に手も足も出せないが、俄（こわか）に急進した川清の富、いや、勢いが逆に自分たち商人の首を絞めやしないかと、危ぶんでいる。川清のその勢いを削ぐため、清治を世話役と称して祭り上げ、結果的に無駄銭を使わせようとしている。それは宿場が開かれて以来、今もその表通りで商いの利権争いもする中、その利権を守り続けるための暗黙の秘策でもあるのだ。

二、ゑびす講

近郷が米の収穫で慌ただしくなる十月を間近にする。だが、今年の米の出来は、夏の寒さが続き近年にない凶作である。このままでは商売の方も大分落ち込みそうで、恒例のゑびす講売り出しをどうしたものかと、寄合いが太陽軒で持たれた。太陽軒はこの町きつてのハイカラカフェである。諏訪町には、おおよそ二十軒余りの店がある。商いも下駄屋、タガ屋、

染屋、畳屋、自転車屋、八百屋、醬油屋、肉屋、提灯屋、古着屋、蕎麦屋、そして髪結い屋や人力車など、一通りの商いが軒を連ねている。また、この諏訪町には役場、そして黒沢尻きつての和賀病院も開院して間もない。

太陽軒の寄合いでは、旦那衆が頭を抱えるがこれといった妙案が出ない。ゑびす講の相談より清治の最近の商いを讃え、ある部分では褒め倒すような雰囲気が出た。店中に漂う始末である。割烹着姿の女給たちも、旦那衆に促され同様に持ち上げる。

「川清さん、次の店はどこに出すんだね」

「あなたの才覚なら、こんな時勢でもきつとどこに店を出してもうまくいくよ」

と言う周りの言葉に清治は、

「まだまだ、ひよっこでして、皆様方のような老舗とは違い、まだまだ信用がからつきし足りません」

と至つて謙虚である。そんな青臭さを嫌う者も世の中に居るもので、奥の座席で野沢という山師が声を掛けてきた。最近、役場の裏手に住むようになった素性の知れないインテリ風な男である。

「なあに川清さん。商いを拡げるなら今が絶好機ですぞ。人のやらない時にやる、それが商売というものですよ」

そして、もう横黒線の測量も始まると聞き、あと五年もすれば馬車鉄に取って代わり、

西山まで鉄道が通じる時代が来るとも言う。

野沢が言うように、明治の終わり頃から黒沢尻と横手を結ぶ鉄道の敷設が計画されていた。

西山の鉱山景気を当てにして、本町と新町に加えて諏訪町だけだった黒沢尻の町が、丁場から新道が西に延びるように造られた。その新穀町は周りを尻目に、不夜城のごとく花街として大変な賑わいを見せている。清治はそんな町の動きもしかと頭にある。

「そうですか。そんなに早く西山に鉄道が」

山師の話に興味を示した。

川清のような生ものを扱う商売は、いかに浜から速く魚を運べるかどうかに大きく左右される。鉄道が横手まで通れば、当然ながら西からの海産物の仕入れもし易くなる。逆に川尻や横手まで川清の商売を拡げる絶好の機会でもあることは、頭の回転の速い清治にはすぐ理解が出来た。

旦那衆が囃し立てるように、

「西山、川尻に店を出したらいいだろうよ」

「そうだそうだ。その軒先でもいいから貸して貰えば、わしらの品物も売れるな」

「いやいや、品物に限らずともいいな」

「諏訪町の山の店、万屋だな」

とてつもない大きな夢に、一同爆笑となったが、その中でただ一人、清治はまんざらでも

なさそうである。山師が更に続ける。

「日本国はこれからきつと、大陸も含めた大きな帝国となるであろう。とすると、その新しい国造りで、鉾山はますます繁栄する」

「どこにでも一攫千金の銭の山が眠っているとは限らない。誰もがその山を掘り出せる訳ではない。商売には好機というものがある。その好機に手が出せる商人も限られている」

と清治の気を煽り、指し示すような仕草を見せる。世の中や海の向うの話をされればされるほど、律儀にも清治はそれを鵜呑みの知識として吸収してしまう。また、このように周りから期待されることに嫌な気持ちもしなかった。

兎びす講の話もそつちのけで、酒宴がたけなわとなる頃、蝶ネクタイ姿の斎源の源右衛門が芸姑たちを引き連れて店に入ってきた。店に居る者の視線が一斉に源右衛門に注がれた。これが源右衛門と清治のまともな初対面でもある。芸姑たちを先に座らせ、源右衛門は清治たちのところにやってきたと思うと、山高帽を取り意外にも丁寧に、

「やあやあ、川清さん。あんたのところの商売は宿場一だ。そのうち和賀一かな」

源右衛門は清治を一言にして虜にしてしまう。そう言われれば誰でも悪い気はしない。それが源右衛門のお世辞、上手いところだと分つていても、やはり県会議員の大地主だ。いくら清治が手広く商いを出来るようになったとは言え、一軒の魚屋を構えている清治と源右衛

門とでは明らかに格が違う。清治は源右衛門に両手で包み込まれるよう握手をされてしまい、
図らずも、

「お会い出来て何より光栄です。これからもどうかご指導下さい」

と源右衛門を喜ばせ、優越感を抱かせるような挨拶をしてしまう。これで二人の関係は決
つしたようなものだ。清治のいつもの客相手への褒め言葉やお愛想は、かえって源右衛門の
高飛車な態度に拍車をかけるにすぎないのだ。

またまた、二人の間に盃を持った山師が割って入る。結構酔っている様子だが、さつき盛
上がった話を打ち上げる。

「齋源先生、この川清の川尻店、山の店にどうかご尽力を下さいませ」

源右衛門はちよつと間、何の話か分らない様子である。直ぐさま脇にひっついていた
提灯屋が源右衛門に何やら耳打ちをする。さすが提灯屋の提灯持ちの腰の低さ、手際によさ
である。源右衛門は口髭を撫でながら、

「わしがひと肌脱ごう。川清さん、あんたの商売儀に惚れている。いずれこの町のためにも
なることだ」

先ほど出会したばかりだ。いくら県会議員とはいえ、話があまりに早回りしすぎる。源右
衛門のその言葉に、周りにいる者たちも驚くほどの展開だ。寸劇でも見るように、清治とは
少し距離を置きながら、齋源と川清との話がこの先どう反るか転ぶか、自分たちの酒の肴に

しながら聞き入っている。

清治と源右衛門はすっかり意気投合し、太陽軒を出てからも近くの料亭に上がり込んだ。芸姑を連れ立ったお大尽遊びを共に過ごし、なぜか清治もいつかは手前もと思ってしまうほど、身の程知らずに逆上してしまう。

昨夜の酒も冷め切らず、魚市場に出掛ける足元がまだ不確かである。店先でヨシエと口論となった。山の店の話を女房にしたのである。当然ながらヨシエは、そんなうまい話が転がっている筈(はず)がないと言う。

「お前さん、先ずはこの店をしっかりとやっていくことが一番じゃないの。もう一軒なんて、何であんな山の中の川尻に」

「お前、俺に逆らうつもりか。お前に男の夢など分つて堪るか」

「あゝ、お前さんの言う夢など私には分かりませんね。わたしらの商いは今までの汗水があつてのことではないですか」

二人の話は幾分苛立ち、噛み合いそうな余地もない。ますますいきり立つ清治は、

「裸一貫でやりだした商いだ。こんなところで終わりはしない。きつとこの町一番の商いをしてみせる」

「みんなが俺のことを、次の県会議員にとも引き立ててくれる。そうすれば、ただの魚屋に

終わることはない」

「誰かの代で大きな仕事もしなければ、子供の代になっても今のままだ」

ヨシエは最早（もはや）口出し出来そうもない。「お前も議員の奥方となる、文句あるかい」と、ここまで言う清治に呆れてしまった。ごく最近まで自転車をこぎ、町中走り回っていたというのに、亭主の気の変わり様は尋常ではなく怖い気もした。

それからしばらくは、山の店の話を清治もヨシエもすることはなかった。それどころか、糸びす講売り出しでそんなことを言い合う暇さえなかったのだ。売り出しでは、不作を跳ね返そうと、福を呼び込む、目出度い七福神行列をすることにした。当然ながら主役として清治が糸びす様の役を押しつけられた。脇に大きな鯛の張りぼてを抱え、釣り竿を肩にした姿は、清治に似合いの役でもあった。諏訪町の通りに留まらず、本通り、新町、そして賑橋を渡り新穀町の花街、鍛冶町まで練り出し、町中の喝采を浴びた。

この七福神の仮装行列の甲斐あってか、川清の店頭は客でこった返した。使用人だけでは到底人手が足りず、隠居した父母も借り出される始末だった。店先に樽ごとサンマやニシン、サバやイワシ、そしてイカとタコと、まるで魚市場の品々を店先に移したような魚の多さと安さに町衆は驚かされた。ヨシエも昼飯を食う暇さえなく、釣り銭の勘定やら、配達の指図（さしず）などに明け暮れた。

三、野望

塩引きが川清の店先に暖簾のように吊される頃、金蔵という男が斎源の使いだと言い店に現れた。金蔵はいわば源右衛門の秘書である。丸メガネを掛け、少し神経質そうな身なりをしていたが、斎源の表も裏も十分知り尽くした男のようである。

「斎藤先生よりの言づてです。山の店の件について、一度ゆつくりお会いしてお話ししたいと」

源右衛門の用件を伝えて帰った。

店に居た清治とヨシエは、また唾（いが）み合いをしそうに見合ったが、先頃のゑびす講の売り出しで少しはいい思いをしたヨシエは、亭主をたて一歩引き下がってみせた。少し後ろめたそうに出掛ける清治は、

「話だけは聞いてくる。悪いようにはしないだろう。俺もそんな阿呆ではないさ」

とヨシエに言い訳めいた言葉を掛けた。

新富町の料亭大福楼の二階、清治は斎源と二度目の酒の席を共にすることになった。待ち合わせ時刻より大分遅れ、金蔵に案内されて源右衛門が床の間を背負い席についた。開口一番、気さくに、

「川清さん、まずまず膝を崩して。今日は心ゆくまで、川清さんと飲みたい。いや語り合いたい」

一杯二杯と酒を酌み交わす。間もなくして、それを止めるように金蔵が皮カバンから書類を取り出し源右衛門に差し出した。

「あまり過ぎさないうちに、お願いします」

「そうじゃったな。どうれどれ」

源右衛門はその書類をめくり斜め読みし、清治の酒膳の前に放った。

「これでどうじゃ。後は川清さんの裁量と腕次第じゃな。銭に色は着いていやしないのだから、あなたのやり方次第だ」

源右衛門の放った書類には、驚くような金額を清治に融資する旨が記されている。

「こんな大金を手前（てめえ）にですか」

「いやいや、儲かったらそれ相応の配当は貰います。万が一、しくじった時は川清の身代を担保にして頂くだけで良い」

「川清さんとの間柄で、担保というのもおこがましいが、この金蔵の奴が書類上は必要だと、
頭と首を縦に振らないのでな」

これで斎源から川清への融資の話は終わる。後は源右衛門に注がれるまま清治は盃を重ねるだけだ。

源右衛門の肴の催促に、下働きの女が座敷に顔を出した。その女を見るや源右衛門は顔を崩して手招きをする。

「ようよう、木乃さん。達者でおったか。まずまず一杯いこう」

無理矢理、木乃という下働きに酒を注ぎ、脇から抱きかかえようとした。咄嗟(とつさ)に避けようとする女の盃の酒が源右衛門の着物を濡らす。詫(わ)びながら布巾で着物を拭こうとする女の後に廻り、源右衛門は今度は尻を撫(な)でようとする。

「はっはは。木乃さん。いつでもわしが面倒を見るといふのに。こんな処で下働きなどをせんで済むぞ。いつまでも待たせるな」

女は慌てて逃げるように座敷を出て行く。清治も勿論金蔵も見て見ぬ振りをする。源右衛門は何人かの妾(めかけ)をあちこちに囲っているのだ。廊下越しに三味の音がしてくると、源右衛門が手を叩き、自分らの座敷にも芸者をと命じた。大福楼の女将が機嫌直しにと、芸者とともに座敷に賑やかに顔を出した。源右衛門より酒が強そうな女将だ。源右衛門は女将と芸者を両手に抱きかかえ、口に盃をあてがって貰(もら)う始末であった。

清治は汗して働くこともなく、大金を手にした。いや、借りたのだがそれが手元に入ると、もう手前の銭のような錯覚に陥るものだ。そうなると少し、商売への意気込みの緩みが目立ち始めた。心中はこの銭を使い、次の商売、儲け仕事を始めることで一杯である。店はヨシ工と使用人に任せ切りになる。

午後ともなれば寄合いたとは言い、諏訪町の旦那衆と山の店の出店のあれこれを、清治の設（しつら）えた酒の席で話を交える。旦那衆たちは、清治のお手並み拝見といったふうで、誰一人山の店の本腰になる者はいない。愛想いい返事をしながら、タダ酒にありつくことしか眼中になさそうだ。いずれ、清治の軍資金が続くまで清治に集ろうとしているのだ。それが旦那衆の元々の狙いなのである。

ある時の寄合いの席で、いつものように山師の野沢が講釈する。

「娘義太夫、いや、これからはもう活動写真なるものの時代が来る」

「ほー、活動写真とな」

それならばと、町内の君代座と出来たばかりの寿座もじっくり見ておく必要があるという話となった。君代座は太陽軒の真向かいにあり娘義太夫で賑わいを見せている。一方、寿座は新穀町の裏道、馬検場への通りに小屋を構えたばかりだが、この土地でも大きい屋体とし

て数々の興行を打っている。

初雪が降つて間もなく、清治たちは真つ昼間から旗竿が立ち並ぶ君代座で娘義太夫に興じた。芝居が終わり太陽軒に移ろうとする時、太陽軒の前を女を背負い、新富町の方角に急ぐ男に出会した。その様を見て誰かが野次つた。

「よつ、道行きか」

その男は脇目も振らず去つていったが、提灯屋が知っているらしく、

「あいつは和菓子職人の喜六だ。大した商いもしていないのに、生意気な奴だ」

清治も時々見かけて知つてはいた。商いは違うがなぜか気になる男だとも思っていた。

「さき、山の店の社長。道の真ん中に立ちんぼでは往来の迷惑ですよ」

連れの者たちに追われるように、割烹着姿の女給が待つ太陽軒に押し込められた。

四、点灯祭

その年を越しても、遅々(ちち)として山の店の準備は進まない。船頭が多くて話が一つにまとまらない。清治の決断が、この頃からやけに鈍り始めたのが原因でもあった。

世間では銭を持った者に、いろいろとその使い途について知恵を授ける者が多い。時には指南する者さえ出てくる。山の店のためにと資金を源右衛門から融資して貰ったものの、鉄道の開通までまだ年月がある。一方で、手っ取り早い別な事業に投資したらどうかと、言ひ出す者も現れる有り様だ。

いつもの山師の野沢が、

「今年の秋にはやっとこの町にも電燈が点く。そうすれば、やはり町中での商いも捨てがたい。これからは物を拵(こしら)える道具も電気で動かすようになるそうだし」

とも言う。確かに近年の町の変り様は、以前とまったく想像もつかない速さで進んでいた。都会では何でもハイカラ流行りである。清治はいろいろ思い悩んだ。商いの仕方、いつかは行商に出ることもなく、大きな店を構え、町にやってくる者たちにさまざまな品物を取揃えれば、評判になるに違いないとも考える。第一、店売りの方が掛かりがからなくて済む。今までのように忙しい思いを少しでもしなくても済むということだとも。

そうこうしている時、痺(しび)れを切らしたかのように、斎源の金蔵が折り入って話があると店に訪ねて来た。金蔵の話は、源右衛門がえらく腹を立てているとのことである。川清

に融資してから事業を進める訳でもなく、未だ何の形も見えていないのはどうしたことなのか、という話であった。そして、早く山の店を開店できるようにと。何となれば、山の店の用地を源右衛門が自ら斡旋、仲立ちをするとの意向も伝えてきた。逆にこの意向に従わなければ、融資した資金の引き下げもあり得るとの含みのようでもある。清治は慌てて、

「おい待てよ。それは手前(てめえ)の自由、裁量と齋源さんが言っただじゃないか。銭に色は着いていないともな」

逆に金蔵は、

「それはそうと齋藤先生は言いましたが、いつまでも、とは決して言っではいけません」

「第一、今まで配当もない事業資金をそのまま寝かせて置くとお思いですか。川清さんは、そんな商売知らずでしたか」

清治はそうした投資とか配当などという胡散(うさん)臭いとも思える話にまったく疎(う)と(い)。銭に色が着いていないと言うものの、銭は汗水して働いた者たちの手垢が着いている。当然いろんな者たちを渡り歩くのが銭である。銭の大小ではなく大事にすべきものがあると清治は思っている。しかし、金蔵の言うことにも一理ある。それならばと、源右衛門の仲立ちする山の店の土地取得について、源右衛門に任せることとして金蔵に帰ってもらった。

実は源右衛門が持ち込んだ山の店の土地は、齋源が抵当として押さえていた土地である。

二束三文の土地であり、いずれ横黒線開通に際して、無理矢理何かと理屈をつけて剥ぎ取る

うとしているものである。それを高く清治に売りつけようとしているのだ。それも必要以上の広い土地をまとまつた額になるように、温泉開発とか何かと周辺の開発話を膨らませて清治に伝えた。

そんな裏話があることも知らず、清治は土地の手当てが出来たことに一安心した。次の上屋の建設をどうしようか、あちこちに相談して回った。当然ながら魚屋に木材や大工の話は分らない。どの商売でもその道の者に任せるべきだと、これも結局、地元 of 土建屋を信用し一切を任せることにした。ここでも裏では源右衛門と通じていた。この現場でそれ相応の手数料を、密かに源右衛門は裏献金として懐に入れた。

土地の整地も無事終え木材の刻みも済み、どか雪が降る前には棟上げを早々にし、建物の側だけは早いところ囲ってしまおうとしていた頃である。黒沢尻の電燈の点灯祭が賑々しく行われた。本町、新町の通りに飾りや門が設えられ、大勢の町衆が見守る中、電気がこの宿場町にも灯った。ハイカラな街燈も広瀬橋のたもとに登場し、町の中が歓声に酔いしれた。

点灯を待つて、華々しく火花が通りから打上げられる。薄暗くなり始めた空に、大輪の花は四方八方に広がり、散った。昨年 of 凶作を吹き飛ばすかのような音が、町中に響き渡る。事もあろうに、その何発目か of 火花 of 火の粉が、君代座の茅葺き屋根の上に落ちた。折から吹き始めた西風に煽(あお)られ、瞬く間に屋根を焦がし燃え上がった。半鐘が鳴り響く中、

町衆はあちこちに走り惑う。半纏姿の消防団たちが走り回る姿からは、君代座だけで済むかと思えた火はその後もいつこうに衰えぬ。それどころか、煙と共に諏訪町の通りに覆い被さる勢いである。

点灯祭を源右衛門の脇で見ていた清治も、君代座に火の手が上がったのを見て、一大事と慌てて店に駆け戻った。ヨシエも使用人もどうしたらよいのか慌てている。半鐘の音とサイレンがよけいに気を動転させた。

「何してるんだ、屋根に水をかけろ。親父たちはどうした」

清治が叫び指図する中、そんな間にも諏訪の通りを西から一軒、また一軒と火は飲み尽くし、しだいに川清に迫ってくる。清治は燃やしてなるものかと、水を店に掛け続けた。

結局、鎮火したのはその日も遅くだった。川清の店を焼き尽くし、皮肉にもそこで火事は止まった。おそらく水ものを扱っていたから清治の店のところで火の手が急に勢いを失ったのだと町衆は言った。だが、手前の店を守れなかったことに清治は一番悔しい思いをした。

まだ、焼け落ちた黒い残骸に火が燻（くすぶ）る中で、清治とヨシエは呆然としていた。二人とも真っ黒になっている。

「あんた、どうするの」

ヨシエが精魂尽きたような声を掛けるが、あまりの悔しさに耐えきれず、

「どうするつて。また一から出直した」

清治はそう言うしか術(すべ)がなかった。店が再開出来るまで店の使用人たちには暇を与えることにした。その日の夜中、時遅しと冷たい秋雨が降り始めた。諏訪の通りは、朝方まで霧に煙ったように、その火照りを冷まそうとした。

気を取り直し、半月もしないうちに清治は、急拵(こしら)えの店を何とか狭くても商いだけは出来る構えに拵えた。あちこちの古材やら建具の払い下げを頼み込み掻き集めたのである。店の裏手にヨシエと寝泊まりする板間も何とか確保した。両親と子供達は当分の間、ヨシエの実家に預かつて貰うことにした。

この予期もしない降つて湧いたような災難で、山の店は上棟寸前で建築工事を休止してある。山の店どころではない。川清の商売が続けられるかどうかの瀬戸際でさえあるのだ。

この貰い火は、結局清治の貯えを無くさせてしまう。山の店の建築費の中間金の支払いをこれ以上延ばす訳にもいかなかった。残つたのは源右衛門から融資して貰った借財だけだった。

金蔵が源右衛門の使いとしてやってきたのは、川清の急拵え店がやっと出来上がる頃だった。金蔵は火事見舞いを兼ねながら、

「何かお力になれることがありましたらと、斎藤先生が申されてました」

と見舞いの口上を述べると、

「そのお手伝いと言つては何ですが、山の店のこれからを私共で引き継ぐことで、お手伝いできればと思つておりますが」

と言ひ出した。清治もこのまま山の店の建設を中途半端にしておくことは出来ないと思つていた。さりとて、完成させ店を開店までこぎ着けるだけの資金は、今となつては工面できそうもない。それを知つてか金蔵が、

「すべての営業も私共の方で手配させて頂きます。斎源に全て譲渡して頂きたい」

程々疲れ切つた清治には一瞬要領が得なかつた。金蔵に詳しく訊ねた。

「と言つと、借金はどうなるのですか」

「そのお金ですが、私共でもこれから多大な投資を再度することになります。それで基本的には土地代と今まで投入して頂いた建築費の一部を斎源で肩代わりする形とします」

清治は地獄で仏に会つたようで、

「それは助かつた。それでチャラですな」

助かつたと、ふーと息をする。だが、金蔵が皮カバンから書類を取り出し、

「いえ、そう言う訳には参りません。こちらもそれなりの投資をする訳ですから、このくらいでお願いすることとなります」

書類に記した金額を指差して見せ、非情にも付け加える。

「いやはや、大変な時に申し訳ございませんが、私共もこれから多大な負担を背負っていますし、これが限度です」

清治にこれ以上交渉する気力はすでに失せていた。少しでも重荷が少なくなればとしか、この時は思ひは巡らない。金蔵の持参した齋源の言いなりの書類に拇印を押し、帰って貰うこととした。

少し頭を冷やして算盤をはじくと、その金額は源右衛門から融資して貰った金額の五分の一にも満たない。手持ちに残る銭を加えても三分の一にもならない。結果として、半分以上の銭がただの借財として残されてしまった。ヨシエの実家にも借金をし、少しでも借財を減らそうとしたが、かつての魚屋川清の勢いは失せてしまっていた。そうになると、町衆や客は恐ろしいもので、潮が引くように川清の店先から去っていつてしまった。

四、ペテン

年の瀬の朝早く、斎源の源右衛門が茶をすすする。巾着から取り出した証文の文面をキセルでぎりりと指した。

「川清さん、今日こそケリをつけてもらいますよ」

「今日ですか。何とか明日まで待つてくれませんか。明日なら何とか……」

「わしのところも、好んで人助けをしている訳ではないですがね」

源右衛門は煙草に火を点け一服ふかす。急拵(こしら)えの店の奥、荒板の板間に跪つき丸くなり清治はしきりに頭を下げる。源右衛門が禿(はげ)上がった頭をさすり上げ、丸眼鏡をなおし少し強ばった素振りをつくる。

「いやいや、川清さん。もう期限が過ぎて半年ですよ。いくら何でも利息ぐらいは拵(こしら)えてもらわないと困りますな」

板間の陰、清治の女房ヨシエが息を殺し、この成り行きを思いつめたように聞き入る。しかし、今のヨシエには何もしてあげられない。すでに里にも借財を重ね、清治の年老いた両親と子供たちをも預けている。これ以上頼ることは到底できない。ヨシエはあの時、亭主を止められなかったことを今しきりに悔いている。埒(らち)がいかないと、源右衛門は既に次の策を決めている。初めから策略していたことでもある。内心、こうも事が早く運ぶとは考えてもいなかったのが驚きだ。

「それじゃ、明日だね。払ってもらえない時は、証文に記している通りこの土地と店は借金

の形ということで異存はないですな」

「……は、はい……」

清治はそう返答するしかない。

「それじゃ、朝支度の忙しいところを邪魔してしまったな。と言つても、見た所この有り様じゃ、店を開けるのも難かしそうだがな」

源右衛門は店の土間づたい、通路にはみ出し所狭しと置かれた魚箱や樽をいかにも邪魔そうに、わざと蹴飛ばす。魚箱の崩れる音を背に源右衛門は帰っていく。後からヨシエが追いがたびしのちくはぐな板戸が建つ店先で、頭を何度も何度も下げる。

清治はすっかり肩を落とすきつていいる。相撲取りのような貫禄ある体つきも、今となつてはひどく情けなくすら見える。茶ぶたいの前、膝を崩しどうしたものか腕組みをする。しかし、清治の力では今更どうすることもできない。そんなところまで川清は追い込まれている。

店は瀕死の状態で二進(にっち)も三進(さつち)も行かない状況である。

ヨシエは源右衛門を店先で見送り、樽からこぼれた水溜りをまたぎ板間に戻ってきた。

「あんた、明日なんて言つて、どこにあてなどあるの」

「畜生、あの斎源め！」

清治は拳を握りしめ、湯飲みが飛ぶほど茶ぶたいを叩き悔しがった。

「あんた、今日の店はどうするの。市場に行く金もないでしょ」

「ツケで何とかなるだろう。俺のところだつて長い付き合いの商いしているんだ」

「そんなこと、もう出来ませんよ。みんなうちの店の経済のこと知っているんだから。齋源さんが陰で触れ回っているという噂ですよ」

「あん畜生。俺をベテンにかけやがつて」

「うまい話に乗つたあんたも、あんたでしょ。だから言つたでしょ」

店の奥、板間で二人顔を合わせても、出るのは深い溜息ばかりだ。押し迫つた暮れの遅い朝の陽が、やつと板戸の節穴から土間に差し込んでくる。

「本日休業」の貼紙が、表戸で寒風に吹かれ、今にも剥がれそうである。齋源が期限を切つた翌日が無常にもやつてきた。

いつ、あの源右衛門が顔を出すか清治は気掛りでならない。昨日も店をとうとう開けることも出来ず金策に走つた。諏訪の通りの旦那衆もあてにならない。通りの半分が類焼し、皆がそれどころではないのだ。君代座からの貰い火で焼けた店は、自力でそれなりにこの難局を乗り切ろうと躍起になっている。ただ、川清には山の店の借財がその上に重くのしかかっているのだ。

午後も大部遅くなつた頃、

「ごめんよ。川清さんいるかい」

店の土間に二つの影が立つている。源右衛門と金蔵である。用件をズバリ告げた。

「金策は出来ているのだろうか」

何の返答も出来ない清治を見透かしたように、源右衛門は「そら、見たことか」と、内心勝ち誇ったような態度を隠せない。これでしばらく県会議員の地位は安泰だとさえ思っている。清治はただ頭を下げる。悔しさで源右衛門を叩きのめしてやりたい気持ちだが、約束の錢も用意出来ないのでは、ただ黙って堪えるしかない。

「それじゃ約束通り、この土地は借金の方ということで異存はないね」

「金蔵、証文に判を貰いなさい」

金蔵は清治の太い親指を朱肉に押しつけ、証文にその指を押させる。清治はただされるままに従うしかない。これほど錢が人を卑屈にさせるものかと、改めて清治は悔やんでいる。手前で掘った穴に落ち込んだような気もさせ、つくづく錢は恐ろしいと思いました。

「店も間もなく取り壊しますから、早々に出ていって貰います。明日と言わずに今日にもよろしいですか」

源右衛門が容赦なく言う和金蔵が、

「先生、ひと嵐来れば跡形もなくなるバラックですよ。壊す人足を使うのは勿体ないくらいです」

清治が何とか拵（こしら）えた仮店舗も、源右衛門たちの前ではただのバラックらしい。源

右衛門と金蔵は用が済むと表に出て、辺りの土地を見回す。何かこれからの策略を練るような話をしながら引き上げていく。

表戸が開けっ放しになったままである。清治は土間に尻餅をついている。どうしたらいいものか皆目見当がつかない。すべてを失った今となつては、手前が息をすることさえ精一杯のようである。脇でヨシエは、この先どうなるのか押しつぶされそうな不安に襲われ、ただ涙を流している。

五、乞食

土間もすでに薄暗くなっている。やっと清治は無表情に立ち上がり、店の後始末に入った。ヨシエは未だ何をどうしたらいいのか心持ちの整理がつかない。ただ、亭主を止めきれなかった後悔だけに苛まれている。

「今晚からどこに寝泊まりする？」

ヨシエが聞く。

「そうだな、真夏ならそこの野っ原でも橋の下でも雨露が防げればいいが。この暮れの寒さじゃな」

「やはり、川岸の里にお世話になりましたよ。それしかないじゃありませんか」

「だがこれ以上、厄介かけたら。お前の両親、第一、弟に済まねえだろう」

「それはそうですが……」

そう話した切り、それ以上二人の思案は続かない。表は少しだけ風が舞っている。

その沈黙の中に、誰か表戸を叩く音がする。清治とヨシエは今時誰だろうと思った。もう閉じてしまう店に今更何の用事があるのだろうか。借金取りでもあるまいし。もし、そうだとすると何も持つて行くものはない。清治は表戸を開けようともせず、

「もう商売はやつていませんぜ」

と返事をする。

だがまた、表戸を叩く音が聞こえてくる。いい加減清治も呆れてしまい大声で、

「もう何もないんだ。破産だよ。おつ潰れてしまったのだい。お終いだよ何もかも。こん畜生」

と側にあったザルを表戸に投げつけ、手前に言い聞かせるように怒鳴りつけた。

しばらくすると、またしても表戸を叩く音がする。今度はヨシエが、

「やはり出て見ましようか。別の用事の人かも知れないじゃないの」

表戸をこじ開けると、表も中もさして変らぬ温度だが、表から冷気が渦巻きとなつて中に吹き込む。表の薄明かりの中、人影が一つ立っている。それは、見るからにみすぼらしい身なりをした乞食である。ヨシエが立つ表戸の脇から清治も顔を出し、

「ご覧のとおり、見るからにたつた今潰れた店だ。申し訳ねえ、何一つ恵んでやれるものはない。すまねえが余所をあたつてくれ」

乞食はそう言われても、戸口に黙つて立つたままだ。顔の表情は良く分らない。ヨシエもお願いするように付け加え、

「亭主が言う通りです。濟まないがお引き取りを」

と言ひ、表戸を無理矢理閉めようとした時、乞食がやつと口を開いた。低く重々しい通る声である。手をゆつくり振り、

「いやいや、わしゃ物乞ひに来たのではない。何かお前さん達の手助けは出来やしないだろうかと、ずっと立っていたのだが」

「お前さん達が、わしを入り用としなければ、仕方がないがな。他所へ行くばかりだがな」
清治が乞食を見下すように、

「お前さんに一体何が出来るというのだ。この乞食が。冗談もいい加減にしろ」

「お前さんの手助けでこの店が再び生き返るのなら、こんなみじめなことになどならん」

乞食は清治にこうどやさされると、

「そうですか。ところでここを引き払いどこかに行くあてなどあるのですか」

「お前さんになんか、心配されてどうにかなるのか」

ますます乞食の話に、清治は怒りの度合いを高める。この様を誰にもぶつつける相手がないのだ。

乞食は少し目を伏せて、

「いや、何も持てなすことが出来ませんが、良かったらわしの処に来ませんか」

清治はその誘いに、この乞食は一体何を考えているのだろうと訝った。もしか、この身なりからは思いもつかないが、道楽者のどこか大きな屋敷の旦那ではないかと。到底有り得ない思いを巡らせてもみる。落ちぶれてしまうと乞食さえ金持ちに見えるのだから性がないと。しかし、この場に及びどこへ行くあてもない。この乞食に騙されて付いていくのもいいかも知れないと腹を括った。

そうなると清治とヨシエは、荷車に積めるだけの家財道具を荒縄で結わえた。大層な屋敷であれば、また取って返してくればいい。源右衛門のところには壊される前なら、必要な家財道具は運びだすことができるだろうと。

支度を終えると乞食は出掛けに、「水を一杯ご馳走してくれ」と言う。ヨシエが水瓶から柄杓(ひしゃく)に水を汲み乞食に差し出した。乞食はその水の匂いを嗅ぎ、一口含むが、「これ

じゃ、運も逃げていく筈だ」と、こっそり土間に吐き出した。

すっきり暗くなつた表に出ると、

「それじゃ行くとしますか。わしの後に」

乞食は高々と西を指差した。

諏訪の通りでも、かつて夜逃げする者が居たが、今は手前たちがこうして夜逃げのような格好で、この参道を立ち去らねばならぬ。口惜しさを抱きながら、鍵屋の蔵の手前を左に折れ、太陽軒の前を通り過ぎる。その向かい、火元の君代座の後はすつかり更地となっている。

少し下ると高砂町に入り、今度は右手に折れ萩江堂の横に出る。新町を横断すると、馬糞と土の臭いがする馬検場が広がる。乞食は和賀川の段丘沿いに邑を成した大曲の集落に入った。

「やつぱり、どこかの屋敷に辿り着くのか。この辺りにそんな長者が居たのか」

と清治がヨシエに訊ねるが、ヨシエは首を横に振る。そんな期待も束の間で、もうすでに大曲の集落のはずれである。大きなポプラの木の下、乞食は小さなお宮を指差し、

「ここです。ここがわしの住みかです」

清治もヨシエも、結局はただの乞食にすぎないとえらく肩を落とした。初めから期待する方が悪いと半ば悔やみもし、諦めもした。荷車を堂の脇に着けると、

「さあさあ、狭い処ですが遠慮せずに。雨風はしのげるだろう」

堂の中に乞食は二人を招き入れ、ちびた一本の蠟燭を灯した。ほの暗い灯りを囲み改めて

互いの顔を見合わせた。清治とヨシエは余計に気持ちが悪くなる思いがした。中には幾ばくかの道具があるだけだ。到底狭い堂内には積んできた家財道具は入れることは出来ない。

「何の持てなしも出来んが、貰った餅があります。これを焼いてご馳走しよう」

乞食は祭壇に供えられた丸餅を掴み表に出ると、堂の脇で七輪をバタバタ仰ぎながらその丸餅を焼く。

「とんだところに来てしまったな」

清治も呆れてしまっている。焦げて真っ黒になった丸餅が清治とヨシエに差し出される。どこか膨れたヨシエの顔に似ていると、手前の置かれた状況も忘れ、清治は可笑しくて堪らない。

「少しカビ臭いかも知れんが、何とか食えるだろう。さつき遠慮せず」

乞食は丸餅の焦げもろとも齧り付く。歳の割に歯が丈夫そうできらりと光る。それを見て、清治もヨシエも丸餅に齧り付いた。とても堅く、食べられたものではなかった。

すでに年越を数日前にしている。清治もヨシエもこれからどうしようかと焦るばかりである。このまま乞食と一緒に暮らしを続ける訳にもいかない。早く両親と子供を引き取らねばならぬ。さりとて、新しい商いへのメドもない。この歳の暮れ、都合のいい働き口もない。かと言って、まだ商いの道から手を引く気にもなれず、二人はあちこち何か商いになるものはないかと、元手の要らぬものはないかと探し回った。そんなものが易々転がっている筈がない。馬市の糞でさえ拾い、商いにする権利を争っている有り様だ。また、お宮の板を剥がし棺桶を拵えて売る者まで現れる始末である。相変らず乞食は、日中ぶらり町に出掛け帰ってくる。何かを手にして帰つて来る訳でもない。

また、ここ数日の如く餅を嚙りながら、二人に乞食が訊ねる。

「どうじゃな、何か商いになるものは見つかりましたかな」

「そんな造作なく見つかる筈がない。だが、お前様のように乞食で終わるような真似は決してしない。早くここから出させて頂きますぜ」

清治がムキになると乞食は、

「まあ、何も今さら、焦らんでもよかろうに。この暮らしがそれほどお嫌いかな」

「お前様のように、到底平気では居られん。働きもせず、人様をあてにして生きるのは手

前の性分ではない」

清治はそう言つて退けてから、齋源からの借財を思い、手前も詰まるところは人様をあてにしてしまつてこの有り様だと思ふ。清治の話に乞食は齒に挟まつた餅を指で突つつきながら、

「そうかい、ここが嫌いな。何もなくていいと思ふがな。第一悩むこと、心配事がないぞ。あればあつたで、心配の種は尽きやしないものだ」

清治は乞食の話聞き流している。清治は商いというのは、必要だと思ふものを見つけ出して売ることであり、何も欲しいものがないと言つてしまえば、商人はお手上げだとも思っている。その考えを説くように、

「そんなことで、この世の中は回転しませんよ。日本だつて物を売りさばく場所を求めて、大陸に進出しようとしているのだとも言つそうだから」

これは例の山師の野沢の受け売りだ。何とか国の経済を維持していくために、物を売り込む、市場を拓げる大陸への進出が続いている、と野沢は言つていた。

そんなことを乞食はいつこうに荒事にせず、

「錢がある者は、本当に欲しい物がない。いや、必要なものが何か分らぬ。一方で錢がない者は、生きていくための最低限のものが何か分る。分るかな」

そう言つて清治に問うた。

「お前さんたち夫婦の本当に欲しい物は何ですか」

そう言われて清治は困った。いや、本当のこと何が欲しいのか分らない。だからこそと、
「手取り早いのが錢でしょう。錢さえあればこの世の中何とでもなる」

としか返答しようがなかった。乞食は本当に錢がない者は、その錢がなくても何とかなるものだと、この世で生きるために錢がなくてもいいと言い切った。例えばと、

「水があれば、数日は生き延びれるだろう。ひよつとして、一ヶ月だつて生きられるかも知れん。むしろもこうして丹波のお宮の湧水に毎日世話になっている。この水なしでは到底生きられまい」

そう言いながら自分のこの話に、乞食は膝を一つ打ち提案する。眼がぎらりと輝く。

「いつそのこと、この湧水の水を売ってみてはどうか。タダだぞ」

この提案に清治は、

「そんな馬鹿な。水を買う奴がいるもんか」

相槌を打ちヨシエも口を挟み、

「それはごもつとも水は大事だけれど、錢を出してまではね」

と、付け加えもした。だが、乞食は本気そうである。

「まずは、騙(だま)されたと思つてやってみるがいい。明日の年越に若水と称して、諏訪の神社の初詣客に売つてみるがいい。やりもしないで、頭からダメだと言うのは、商人の言う

ことではない。何しろ元手は一銭も要らないのだからな」

一度は馬鹿馬鹿しいとあざ笑いもしたが、言われれば清治も簡単に納得してしまう気質(たち)である。ただ、水を欲しがる者が居るかどうかは分らない。だが、それを新年を迎える「若水」と言えば、ただの水ではなくなる。元旦に拝む朝日がとりわけ初日の出として敬い、東の空に向かい誰しもが手を合わせるように特別なものかも知れない。また騙されたと思い、一つやってみようと清治はヨシエを促す。乞食も手助けしようと言う。

年越の日、水を入れる樽を何とか調達をした。乞食はどこで見つけてきたのか、白い布に「初荷」と朱書きした。乞食に似ず達筆である。それをヨシエが旗に仕立てた。日が暮れるのを待ち、荷車に樽を載せ、荒縄でぎりりと結わえた。丹波湧水の脇に荷車を寄せ、湧水を汲む支度に入った。

清治とヨシエは上手くいくよう湧水に手を合わせる。水底から絶え間なく湧き出る水の様子を指し、乞食はこの堂の言い伝えをどこで聞いてきたのか講釈する。

「ここに祀られているのは龍神であり、龍神は雨と水をつかさどる神様で、雲を呼び雨を起し神秘的な威力を持った神様である」

また、こうも言う。

「古来、密教では、不道明王をはじめ五大明王、八大明王が龍神の姿に変化し、一瞬にして

全世界を駆けめぐり、いかなる事物も意のままにする自在力、神通力を備えていると言われてもいる。そうだから、その力を以て一切の悪魔を降伏させ、諸々の厄を祓い家運隆盛、商売繁盛を招く厄除け、開運の神様でもある」

長々と講釈がされた。清治も合点がいったようで、

「そうか、龍神様だな」

そう言われれば、これから汲み取る水も、ただの水ではなく思えてくるから不思議なものである。

樽一杯に水を汲み終えると、先頭を清治が曳(ひ)き、その荷車の後をヨシエが押す。樽を縛る荒縄に初荷の旗竿と幣束を挟み込んだ。乞食は、薪に火を点け松明代わりに先頭に立つ。樽の水を一滴すらこぼさぬよう三人は東の方角、諏訪の杜を指して進み始めた。

ついこの間まで店を構えていた諏訪の通りに行く。もう、待ち切れず初詣に繰り出す町衆たちがちらほら目につく。清治たちの初荷を指差す者もいる。当然ながら訝(いぶか)る者もいる。諏訪神社の境内に着くと、程なく染黒寺の除夜の鐘が鳴り出す。白幕が張られた境内ではあちこちに松明が燃やされ、薪がパチパチとはじける音がする。新しい年を迎える気分の高まりが徐々に感じられる。清治たちと同様、境内の参道脇に小店を開く商人も多い。だるま屋、飴屋、羽子板屋などだ。すべて新しい年への縁起を担ぐ品々であり、その縁起にあ

やかり商いをしたいと言う者たちである。

乞食が、

「さあさあ、威勢良く口上を述べよう」

と言ひ清治を促す。もう、嘘でもやるしかない。ここで引き下がることは出来まい。恥ずかしいなどとも言つてはいられない。一つ息を大きくつき腹の底から、

「これは丹波の龍神様の若水。諸々の厄を祓い、家運隆盛、商売繁盛の若水だ」

「さあさあ、一杯一錢。いかがかな」

参詣の者たちが厄を祓うと聞き、一人、二人と荷車の周りに近寄り、怪訝そうに取り囲む。乞食がお取りとなつて、

「どれどれ、縁起物か。一杯くれ」

ヨシエがすぐ柄杓(ひしゃく)で差し出す。

「こりやうめーや。生き返つたようだぜ」

その声に誘われ、客は競つて新たな年を迎えての若水で喉を潤す。また別の客は手の平に注ぎ汚れを取らうとする。荷車の周りにはあつという間に人だかりとなる。その中の町衆から、

「川清さんじゃないか。また商売を始めたのかい。みんな待っていたんだぜ」

「こりや、水を得た川清、魚屋じゃないか」

と口々に囃し立てる。

間もなく樽の水は底を突く有り様だ。清治たちは、「ひとつ走り戻つて参ります」と声を掛け、丹波湧水まで取つて返すことにした。

まだ、夜明け前である。空になった樽と一緒にヨシエを載せ、清治はがむしやらに駆けながら荷車を曳く。荷車の軋む音に混じり、清治の前掛けの中、一錢玉がシャリツ、シャリツと、音頭を取るかのように鳴り出す。

二人は商いに夢中になり、乞食がいつからか居ないことに気付いた。だが、丹波湧水に戻ることに夢中で、乞食のことはそれ以上詮索しなかった。おそらく、諏訪の杜で屠蘇(とそ)か何か正月料理にでもありつく算段をしているのだろうと思ひました。

二度目の若水の荷は、ちょうど初日が東の蒼い山の端、国見山から昇る頃だった。凍てつく冷気の中で、こうして生きていること、何もかも忘れ、商いに再び懸命になっていることに、清治とヨシエはこの上もなく幸せを覚えた。決して大儲けに、銭にならないが、人が求めるもの、いのちの水をこうして町衆に届けられることが嬉しかった。

大曲の集落を抜ける。荷車の初荷の朱文字が一層鮮やかに照らされ、誇らしくたなびく。その脇の幣束に、姿を消した乞食の魂が乗り移り、神通力を与えるかのようでもある。

後を押すヨシエに、

「こ来光が上るぞ。急そげ、しっかり押せ」

と清治が声を後ろに飛ばす。ヨシエも半纏姿のその後から、

「お前さんこそ、前をしつかり見て曳きな。二度とぶれるんじゃないよ」と少し涙混じりの言葉を返した。

寒風の中、朱色と青が滲み合う新しき年の天空に、白い筋雲が龍神のごとく舞い上がり、初日を受けて輝く。魚屋「川清」の再起への新たな始まりである。